

---

# エンジェルライフ

桜楼月華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エンジェルライフ

### 【Nコード】

N5056S

### 【作者名】

桜楼月華

### 【あらすじ】

高校生活も夏休みに突入した主人公「桜木 潤」。彼の元に戻いたダンボール。そして、その中には美少女が…！叶と名付けられたその少女とのハチャメチャな生活を画くジャンル不明な物語！恋愛か？学園か？それとも…。

## 天使は少女

暇だ。

高校に入って早くも夏休み突入しましたよ。時間は早いですねー。白と青の縦じまが入ったシンプルなベットに仰向けになって天井を見上げて俺は寛いでいた。

しかし…こんなにも暇なら、どうか適当にブラブラして来ようかなーとも思ってしまう。けれども、一人でも行っても空しくなるだけでだろう。友人？いませんよ、そんなもの。

「…パソコン、やるかな」

俺の人生で一番付き合いが長いモノ。それがこのパソコンだ。しかし、最近じゃあ見たい物や調べたい物もない。起動させた所でやることなんて、何もない。

動画でも見るかな。そう思い、椅子に座りPCを起動させる。

起動音がなりインターネットが繋がってからお気に入りの動画サイトを開く。曲名を検索し、検索結果の一番上を左クリックする。

ページが開くまでちよつと時間が掛かるのは相変わらずだ。

動画再生の準備もできて再生開始。どこか懐かしいメロディが流れ始める。

「…なんだ？これ」

動画の右。そこに見慣れない広告が貼られていた。

この動画を見るのもかなり久しぶりだ。故に、広告が変わること自体に何かしらの疑問を持つことはない。ただ、その広告は妙な存在感を放っていた。

『天使を欲しいと思いませんか？』

真っ白な背景に、黒い文字でそう書いてあるだけなのに。

「天使…ねえ」

はつきり言って、どういう意味だか全く分からない。

クリックすると凄い勢いでウィルスが入ってきそうだな。

「……カチつとな」

態とウイルスに引つ掛かるのも、偶にはいいかなと思った。  
だが、そこに出てきたのは意外なモノだった。

『無料でお送りします。約三〇秒お待ちください』

その言葉と、画像。画像は…まあ、可愛い女の子だ。となるとアダルト系列か？いや、だが三〇秒ってどういうことだ？そもそも、これってワンクリック詐欺？でも、無料って…。

その時、ピンポンという渴いた音が響いた。

妙な違和感を抱きながらも、部屋を出て玄関へ向かう。

「こんにちわ、ご利用いただき誠にありがとうございます。今週はエンジェルウィークを実施させていただいておりますので、おまけとしてこちら。『天使の服』を無料で差し上げます。どうぞ、好きなモノを一つお選びください」

玄関のドアを開けて、まず驚いた。そこには爽やかな笑顔が似合うお兄さんがいたわけだが…その隣に、何か大きな箱が置いてある。更に、俺に喋らせる隙を与えてくれない。

「お客様？お選びくださいませ。こちらのゴスロリ。ワンピース。スクール水着。ナース服。チャイナ服。どれでも無料ですよ」

「じ、じゃあワンピース！」

とりあえず、適当に済ましてしまおう。そう思った。

「かしこまりました。薄いピンクと白、どちらをお選びになりますか？」

「し、白で」

「はい、では白いワンピースとこちらが天使になります。どうぞ、ご自由にお使いください」

そう言っ、お兄さんの隣に置いてある大きいダンボールを俺の家に無理矢理ねじ込んでくる。

「それでは。またのご利用お待ちしております」

「……………」

そう言って、お兄さんは帰っていった。  
お兄さんが置いていった箱を一瞥。瞬間、ガタツとちよつと動いた。

「…開けてみるか。変な生命体だったら捨てなきゃなあ…」

箱の封印、解除！（ガムテープを外す）。

そこには、箱におさまる様に身を縮めた全裸の少女がいた。よく見れば、さっきの画像の女の子だ。

少女の目がゆっくり開く。

「…あなたが、私のご主人様？」

ダンボールの蓋を閉じ、新しいガムテープで頑丈に再封印。

さっきのお兄さんはまだいるだろうか。さつさと返品しないと、近所から誘拐犯＋変態とか言われてしまう。

「ち、ちよつと！待ってください！誘拐とかにはなりませんから、開けてくださいーい！」

箱からさっきと同じ声がダンボールから聞こえる。ちよつと怖い。要望通り、もう一回ダンボールを開ける。

「出してください」と言って、両手を広げている様はどこか父親に「抱っこして」と甘える子供そのものだった。

普通に少女を抱っこしてダンボールから出すことが出来ている俺にちよつと関心。いつもなら羞恥心で顔が焼け死ぬだろう（そもそも相手は全裸だ。何故今、理性を保っているのか疑問だ）。

「あつ…首痛い」

目を細めて首の骨をパキパキと鳴らす。

そして、首を後ろに捻り背後に立つ俺の顔を見てから確認をしてきた。

「えっと、もう一回確認をします。あなたは私のご主人様ですね？」

「知らん」

「えー…」

だって事実だし。なんだよ、ご主人様って。俺はどっかの金持ち

か？こいつはメイドか？

「とりあえずですね。私は今回『天使』としてこの家に来ました。まずはご主人様のお名前を教えてください」

名前を聞く前に天使ってどういう意味なのかを教えてください。

「俺は『桜木 潤』だ。んで、オメーはなんなの。天使ってどういうこと」

「えーとですね…ご主人様は私からなんて呼ばれますか？」

「なんでもいいよ」

「じゃあ、スカポントンで」

「ぶっ飛ばすぞ」

しかも懐かしいなオイ。容姿はかなり若そうだけど、実年齢はとつくに三十路超えとかか？

「あーじゃあ普通にさっきまでの呼び方でいいよ」

「ではご主人様でよろしいので？」

「ああ、それでいい。…んで、天使ってどういうことだ」

「えーとですね…ご主人様。あなたは私を買ったんです。私は元々は捨て子だったんです。エンジェルライフという組織が拾ってくれて、良い様に育ててくれました。そしてそのエンジェルライフから、あなたの天使としてここに来たという訳です」

エンジェルライフ？そんな組織名、聞いたことないけどな。

「そんで？なんでその組織がお前を売り飛ばす訳で？」

「それがサービスなので…」

おかしくないか？その組織は、こいつを商売道具としてしか…。

いや、俺が踏み込むべきことじゃないな。

「そんで、お前の名前は？」

「それは、ご主人様が決めてください」

「は？」

「私に名前はないんです。組織の方々からも『天使02』と呼ばれていたもので…」

クソ…、なんか胸糞わりい…。

「じゃあ…ドラゴン」

「……………」

「冗談だ、そんな目で見ないでくれ。とりあえず、玄関で話すのも  
なんだし俺の部屋行くか。親来たら面倒だし」

「んで、お前の名前…ねえ」

思いつかない。このさい「ああああ」とかでいいか？

「ああああにするとか言ったら、ご主人様でも容赦なく殴ります  
から」

俺はベットに座り天使とか言うヤツは床で可愛いペタンとした女  
の子座り。…女の子座りって言い方で合ってるのか？これ。

「じゃあ、そうだな…」

黒髪のツインテールで紅い瞳。体形は子供そのものだ。いつまで  
も全裸はやバイだろ、とさっき貰った白いワンピース。それにして  
もこいつの下着どうしよう、という疑問が頭をよぎった。

「黒い髪だから、クロとかはダメか？」

「犬みたいで嫌です」

「…だよねー」

即答されてしまった。

だが、犬か。犬みたいに首輪とかさせたらさぞ近所から嫌な噂が  
流れることだろう。

「…ルシファーとか？」

「それ堕天使の名前ですよ…」

「知ってるよ。けど、意味は光を帯びたものとか光を掲げるもの  
なんだとさ」

ウィキペディアは便利だなー。

「うー、でもなあ…」

やはり堕天使の名前じゃ嫌か。ならどうしろと言うのか…。

「じゃあ分かった。奏<sup>かなで</sup>つてのはどうだ」

某アニメの天使さんの名前だしいいじゃないか。

「<sup>かなえ</sup>だったら叶の方がいいです」

「何故？ホワイ」

「私はご主人様の願いを叶えに来たも同然の存在です。かなでとか  
なえって似てるし、どっちかと言ったら叶の方がいいかあ、と」

「そうか、ならいいんじゃないか？叶で」

「そ、そうですか！じゃ、今日から私は叶です。よろしく願います。  
<sup>マスター</sup>ご主人様！」

不覚にも、叶の笑顔が可愛いと思ってしまった。まあ、実際可愛い  
方に入るんだろうけど…。

こうして、何やら妙な少女が俺の部屋で過ごすこととなった。

一体どういう運命だよ、こんなの。不本意ではあるが、可愛い女  
の子だし別にいいんだけどな。これで可愛くない子が天使として来  
たようなら、さっきのお兄さんに即返品だっただろうし。

しかし、親にはどう説明したもんかな…これ。

## 天使は大食い

…ん、んー？あれ、いつの間に俺は寝てしまったのだろうか。

えーつとお…確か、天使だかなんだか言ってる女の子の名前を決めてから…親にばれたらどうしようと思いいながらも「あー、もう眠い」ってなつてベットに入ってしまったのか。

そう言えばさつきから何か重いな。なんかが乗つかつてる様な「ああ!？」、なんでこうなった。

「う、うにゃゝ。なんですか?」

目を擦りながら、先ほどの少女・叶<sup>かなえ</sup>が俺の「ああ!？」発言の意味を聞いてくる。

「…なんですかーじゃねえよ。なんでベットにもぐりこんでんだ」

「いや、ご主人様から離れないというのは私の使命ですから」

「近すぎだろうが」

そう言つて俺の胸部に顔を擦りつけている叶の背中に手を回し、着ているワンピースを猫みたいに掴みベットから落とす。

「あうっ！い、痛いですよゝ」

お尻痛い、とか言いながら涙目でしかも上目遣い。コイツ…意外とやりやがる！男の落とし方を知ってるってヤツか？あれか、エンジェルライフで教えられたことは男との付き合い方か？コンチクシヨー。

しかし、涙目になつてるところを見るとさすがにちよつとした罪悪感に苛まれる。だが、俺のキャラを崩すわけにはいかない。

「痛いと思つたなら、もうベットに潜り込むんじゃねえよ。俺はちよつと部屋出るけど、お前は出てくるなよ」

そう言つてから部屋を出る。

腹が減った。適当に冷凍食品でも食べるかな。

そう考えながら、俺の部屋の右側に位置する階段を下りる。

「あ、潤。さつき何かが落ちる様な大きい音したけど、何かあったの？」

「別に、なんでもねえよ。それより、食い物あるか？腹減ったんだけど」

俺の母親は最近、疲れた顔をしている。それもそうだろう。俺みたいな息子を持ってしまったんだ。疲れるのも無理は無い。ちなみに、先ほどまでは買い物に行っていた模様。机の上にはエコバックに料理の材料が入っている。：今日の夜はカレーか？

「冷凍食品のカルボナーラが冷凍庫に入ってる筈よ」

「あつそ」

簡単に返事をして冷凍庫からカルボナーラを確認。随分と奥の方に入っている…。

数秒の苦労を用いながらも、なんとか取り出し完了。後はレンジでチンだ。

「……、っち」

更に奥の方に入っているカルボナーラも取り出し、温める準備をする。

そして数分後、カルボナーラを取り出してもう一つのカルボナーラを入れる。

「あら、どうしたの？二袋分も食べるの？」

「ああ」

反抗期ではない。単純に話をするのがめんどいだけだ。

更に数分後にカルボナーラを取り出し、二つのカルボナーラを一つの皿に盛る。こうすれば、腹が減ってるで理由がつくだろう。二つの皿なんか出したら、疑われる＋無駄に皿を使うなと怒られることだろう。それも面倒だ。

皿を持って階段を上り、階段の左側にある俺の部屋に入る。

「ご主人様：それはなんですか？」

「カルボナーラだよ、まさか見たことないと言っんじゃないだろうな」

「い、いえ。さすがに見たことはありますけど…」

涎<sup>よだれ</sup>だらっただら。やはり腹は減るのか。天使とかほざいてても、やはり人間は人間だ。

そもそも捨て子と言ってるし、人間であることは普通に認識してるのか。通称が天使なだけで。

「ほら、食えよ。箸は俺の使っ方がいいから」

そう言っただけ俺専用の紺色の箸を渡してやる。ホントは割り箸でいいかと思っただけが、既に割りばしは今日の朝飯で全てを使いきっていたのだ。

「いいのですか！？じゃあいただきます！」

聞いておいて、すぐに食べ始めた。

しかし、すごい勢いで食べるな…

「それ、俺の分でもあるんだから残しておいてくれよ…？」

「了解でふ！」

…口に物を入れてるときは喋っちゃダメだ、という教育はされなかった様だ。

数分後に叶がカルボナーラを一啜りして完食。あれ？俺の分は？  
…まあいいか。

俺の部屋にある冷蔵庫から冷えた缶コーラを一本取り出し叶にくれてやる。

「あ、ありがとうございます」

そう言っただけからプシュッと音を立てて缶を開けてゴクっと一のみする。その一つひとつの動作が、どこか美しいとか可愛いとか感じてしまうモノだった。

「飲み終わったらそのゴミ箱に入れとけ」

そう言い残し、俺は部屋を出た。

階段を使い一階へ下りる途中、不覚にも思ってしまった。

こんな生活も、悪くはないな。

## 天使は高校に通う

夏、それは海。海、それは水着。だが、俺の周りの女と来たらこいつしかない。この天使として来た小学生バリの貧乳さん、叶かなえだ。「今、失礼なこと言いませんでした？」

「んー。なんのことだ？」

「いえ、気のせいかもしれませんので…」

とまあ、どこか人の心を微妙に読み取ってしまうのも悩みの種だ。しかし、胸を除けば完璧な美少女な訳で…。

俺も男だ。しかも高校生。この時期になると男という生物はいろんなものに興味が出てくる訳で…。

「それで、叶。お前は俺の使い魔みたいな感じのヤツなんだよな？」

「まあ、ゲームとかアニメ感覚で言えばそんなモノですね。基本的にご主人様の命令は絶対ですので」

出た。命令は絶対というお約束。

あ、ちなみに今の状況といいますと、俺の部屋にはまず入り口のすぐ右にタンスがある。そこには懐かしいおもちゃや、洋服・制服といったものが入っている。そのタンスの左には青と白の縦じまが入ったベット。部屋の中央には丸くて小さいテーブル（というかちゃぶ台）があり、ベットと相対する位置に地デジ対応のデカイテレビが置いてある。これでも俺の家は金持ちな方だ。父親はなんかの会社の社長で家に帰ってくることはまず少ない。そのテレビの右、窓側に勉強用机兼PC用机がある。

そして、叶と俺は部屋の中心。丸いテーブルに向かい合う形となつて座っている。俺がベット側で叶がテレビ側。そこで話合っている議題は『どう親に説明した物か…』ということであつた。だが、途中から俺の頭が暴走し良からぬ方向へ思考が回転し始めた訳だ。「話が違う方向に行き始めたので戻りましょう。そもそも、何故あなたの親に私の存在をばらす必要が？」

「そりゃあ…その方が楽だろう。いろいろと」

「その楽というものを具体的に言いますと？」

「家を自由に歩き回ることができ、自由に家を出入りすることができる」

「む…確かに、自由というのは魅力的なものですけど…」

そうだろう。仮にこいつも女の子だ。俺に裸を見られても動じない様なヤツではあるが…やはり、買い物などをして可愛いモノを買いたいのだろう。…そうだな、このことを言えばコイツもばらすこ  
とによつての利益を理解し、ばらす時の言い分を考えてくれるだろう。

「お前だつて女の子だ。家を自由に出入りできれば可愛いモノを買うことだつてできるぞ？」

「ん？なぜ可愛いモノを買う必要があるのですか？」

「え…お前欲しくないの？」

「別に…」

なんだと。そんなバカな…。

ならば、他のことを考えなければ。

「…分かりました。そこまで言うのならばらしましょう」

「ほ、ホントか？やつと分かつてくれたか…」

「はい、これ以上ここで話をしていても無駄だと分かりました。それにご主人様の命令は絶対ですので」

確かに、既に小一時間この議題で話をしている。だが、命令は絶対なのなら最初から…。いや、まあいいか。

「よし。じゃあ早速、親に言いにいく」

「はい、ご主人様」

一回に下りてリビングでテレビを見ていた親を見つめる。「か、母さん」

「……………あんた、遂に誘拐という犯罪を……………」おいこら待てや。

「ちげーよ！なんでそうなるんだよ！」

「はじめまして、お母様。潤君の友人の叶と申します。ちょっとした都合で家族がバラバラで生活しようということになってしまったのですが、私には行く宛てがありません。そこで唯一の友人のご主人……じゃなくて、潤君の家に泊めてもらおうと思ったのですが、ダメですか？」

おお！その方法が在ったか！しかし、さっきまでやる気なかったのに随分と楽しそうな笑顔じゃねえかコンチクショー。営業スマイルみたいなヤツか？

「そ、そう。だけど……若そうね。何歳なの？」

「16歳です！」

「「え？」」

俺と母さんのセリフが重なるなんて、いつ以来だろうか。

「お前、16歳だったのか……？」

「はい、言ってますでしたっけ？（実際の年齢は分かりませんけど）」

「ああ、言ってなかった（そうか、捨て子だもんな）」

目だけで語り合える仲にまでなっていたのか、俺達は。

「学校は？」

「行ってないです。ちょっと問題があつて中退しました！」

そんな設定でいいのかよ……。

「じゃあ、もう一回学校行ってみない？コイツ、なかなか友人作ろうとしないから……」

「え、いいんですか？でもお金とか……」

「いいわよ、こんな息子に使うくらいなら、あなたみたいな可愛い子に使った方が効率的だから」

あれー、なんか母親までもが笑顔になつてるー。こんな顔見るのはいつ以来だろうか……。

叶にはあとで感謝の意を表して飛び出すトカゲのおもちやでもプレゼントしてやろう。コイツの驚き慌てる顔を拝むのはなかなか面

白そうだ。

「じゃあ、二学期から高校に行くと言うことでいいかしら  
「はい！」

あれ、なんでこんなに話進んでるんだ？

ま、まあいい。コイツとの学校生活も楽しいかもしれない。

友人を作る気はないけど、コイツと過ごすのは、最高に面白いだ  
ろうからな。

## 「俺の過去」

叶との生活が始まってから数日が経過した。2学期ももうすぐ始まる。しかし、今日はあまり浮かない。何故って…あることを思い出してしまったからだ。

小説の主人公、というものは何やら思い出したくもない過去というものがある。

これから、俺の思い出したくもない過去を話そうと思う。

中学三年。俺は陸上部に入っていた。その中学では一番足が速いことで有名だった。更に柔道も習っていた訳で、今の俺とは似て異なる存在と言っても良い者なのかもしれない。

その頃俺は、地元の小さな大会に向けて練習をしていた。

家に帰っても、近所を走り回っていた。大会の日が近づくにつれて走るルートを変えていた。

今思えば、何故ルートを変えるなんてことをしていたのか疑問に思うと同時に、ルートを変えなければ良かったんだという後悔が押し寄せてくる。

大会の前々日。俺はルートを町一周に変えていた。町を一周するとは言っても小さな町だ。精々五十キロメートルといったところか（もつとデカイかもしれない）。それに、一周するのに走るのはいく僅かな時間だ。殆どは歩きで、ちょっとした体力づくりのつもりだった。

しかし、のんびり歩いていた俺の目の前に、その光景が目に入ってきてしまった。

ふらふらと危つい足取りで横断歩道を渡る小さな女の子がいた。見たところ、まだ小学校にも入学していないのではないだろうか。

その女の子の身長よりずっと高い場所に位置する信号を見ると、既に青から赤になっていた。聞こえてくるのは車のエンジン音。すぐに嫌な想像がついた。

俺は走った。間に合う保証は、無い。それでも、俺は走った。何も考えていなかった。

嫌なスローモーションが流れる。俺は横断歩道に足を踏み込むと飛びこむようにして女の子を捕まえた。

気付けばスローモーションは解けていて、車はとくに通り過ぎていた。身体には嫌な痛みがあるだけだった。飛び込み、女の子を抱きかかえてから着地した瞬間、硬いアスファルトに打ち付けた肩の痛み。それから、足からそれ以上の痛みが走っていた。

痛みから目を硬く瞑っていたが、なんとか目を開き足の状態を確認する。血は出ていないし、外傷は見当たらない。筋肉を痛めたか……？

次に俺が抱きかかえている女の子の安否を確認する。

…俺は医者じゃないから詳しくは分からないが、俺と同じく外傷は無い様だ。

「ああ！ミキちゃん！」

俺の前方からこの子の母親らしき人物が走り寄ってきた。

「えっと、この子…」

「助けてくれてありがとうございますっ！ありがとうございます！」

その後も、何度も何度も感謝の言葉を言われた。しかし、俺はいつまでも立ち上がれないでいた。

…足が痛い。

…動かない。

それは、陸上部として致命的な傷となった。

中学を卒業するまでになんとか足は動かせるようになったが、走るのは無理があった。今も歩くことはできても走るのは激痛が走る。

足全体が動かせなくなってしまう。勿論、部活は止めたし、柔道も止めた。

あんな子、助けるんじゃないかった。そう思ってしまった自分が嫌になって、どうしようもない夜もあった。

そして、その後はこの通りだ。無気力むきりよくな人間となってしまうた。何故、今こんな話を思い出したのか。それは分からない。ただ、なんだか嫌な予感がする。

こんなこと思いついて、良い事があるだなんて到底思える筈がないではないか…。

しかも、今日は午後から叶かなえと買い物の予定だった…。

## 天使が買い物？

「わぁー、ご主人様！凄いです！キラキラです！」

「ああそうだな」

相変わらず無気力な俺に、叶は構わずショッピングモールの中を走り回る。

その光景は、やはり従者というより自分の娘の様に見える。そんなことを考えて、「なにを言ってるんだ俺は」と自分勝手に突っ込みをいれておく。

「わぁー！」

さっきから「わーわー」しか言っていない叶なわけだが…。さっきよりも一際大きく紅い瞳を輝かせ大きな声で「わぁー！」を言った叶の目の先には、アクセサリー専門店があつた。

「…見てこいよ。俺はそのベンチで座って待ってるからさ。欲しいモノが見つかったら言ってくれ。…あ、でも高いのは禁止な」

そう言うのと更に瞳を輝かせた。

「そ、それじゃあ…お言葉に甘えて行ってきます！」

「おう、いつてらっさい」

手をひらひらさせて送り出す。

数分後、叶が戻ってきた。

しかし、目には先程までの輝きがなくなっていた。

「…どした」

「…いえ、欲しいモノが見つからないんです…。ご主人様を選んでくださいませんか？」

「どういっこつちゃ。」

「なんでだ？欲しいモノがないんなら、無理して買わなくてもいいだろ」

「わ、私は！」

急に大声になって、その声に驚いた人が数人いた。が、俺は気にせず叶の言葉を待つ。

「私は……」

そのまま無言になる。はあ……なんなんだか。

「分かったよ。その代わり、俺が買ったモノに対して文句言っなよ？」

そう言うのと、叶は先程までの瞳の輝きを取り戻し、笑顔で「はい！」と言った。

不覚にも、可愛いと思ってしまった。これで何回目だろうか……。赤面してしまっているかもしれない顔を俯かせて早足でアクセサリ―店に入ってしまった。

本当にそれでいいのか？と聞いたところ、やはり笑顔で「良かったです。ご主人様がお選びになって買ってくれたの、始めてですから」と答えた。

……選んだっていうか、叶が俺に選ばせたんだけどな。あの笑顔で叶が今首にぶら下げているのは、叶の眼の様な大きく紅いルビーがハマっているネックレスだ。

俺が適当に選んできるとき偶然視界に入って、紅いルビーは何故か叶に合いそうだと思ったのだ。「これでいいか？」と聞いたら、叶はすぐ頷いた。

値段は、結構した。それでも、ネットビジネスで稼いだ金の底はまだまだ見えない。

「おら、次は下着とか服とか見に行くぞ。いつまでもノーパンはダメだろ」

「はい！」

態々手をあげて返事をしてきた。

……なんだか叶が幼稚園生に見えてきた……。

洋服店では、かなり金を使ってしまった…。

やはり女の子というものは、こういうことに熱心になるのだろう。俺の両手には、既に服が大量に買い込まれている。にも関わらず、叶はまだ買おうか買わないか迷っているのだ。

「おい、そろそろ行くぞ。飯の時間までには帰って来いって俺の母さんに言われただろ」

「う、うー…」

なにがそんなに名残惜しいんだ。フリフリがついた服なんて動きづらくないのかよ。

男は女の気持が分からない。

帰り道。あとは横断歩道を渡ってから当分真っ直ぐ進んでから右に曲がり、更に当分歩いてから左に曲がると俺の家が見えてくる。歩きだと結構長い。

「ご主人様。今日はありがとうございました。いろいろ買ってくれて…」

「仕方ないだろう。お前、金持ってないし」

それはそうですけど、と言いながら俺が買ってやったルビーのネックレスを指で弄る。そんなに嬉しかったのだろうか。そこまで喜んでくれると、俺も嬉しいというモノだ。

そして、横断歩道が近づいてくる。そこで、思い出した。今日の午前中思い出した「…俺の過去」。

「え？」

しまった。声に出てしまった。

「いや、なんでもない」

そうだ。ただの嫌な過去を思い出ただけじゃないか。それに、

この横断歩道はあの時の横断歩道ではない。

「あ、猫ちゃん」

そうやって、**叶が横断歩道に走っていった。**

「あ」

確かに、猫がいた。けれど、その猫の前に、気付いてしまった。

「赤」。

信号が赤なのだ。しかし、叶はそれを知ってか知らずか猫を拾おうとしやがみ込んでいる。

そこで聞こえてくるのは…車のエンジン音。

[illegible]

無意識のうちに叫んでいた。間に合う保証は、勿論無い。それでも、助けなきや……。この足が無くなるうとも、あいつは……！

そう思う裏腹で、俺は一体なにをやっているのだろう。と思っ  
ている俺もいた。それでも動き出した俺の足は、もう、止まらなかつ  
た。

そして、またあのスローモーションが流れ出した。しかし、俺の前にいる人は真正正銘の俺の大切な人だ。あの時の様な、誰とも知らない他人じゃない。

「痛つ――！」

気付けば、あの時の様に叶を抱いて俺は硬いアスファルトの上を転がっていた。

「くう…」

『大丈夫か？叶』。そう聞きたいのに、声が出ない。体を強く叩き付け過ぎたらしい。息も出来ない。

「ま、ご主人様、大丈夫ですか!？」

バカ野郎…、自分の心配しやがれ。そう思ってから、俺も人のこ  
 と言えねえかと脱力する。

目が開かなかった。あれ、目の開け方ってどういふんだっけ……。  
息の仕方ってどういふんだっけ……。そう思っていたら、自然と俺の  
目が開いた。

そこには、叶の泣き声と涙があった。

「…ああ？なんで泣いてんだ」

いつの間にか、息もできていて、声も出ていた。

俺が声を出した瞬間、叶は俺の顔を見てから涙を自分の腕で拭いて俺の胸に顔を押し当ててきた。

「良かった…。無事、なんですね…？」

「…ったりめえだろうが」

まだ、死ねねえんだよ。心残りがありすぎてな。

## 天使は心配性

…何故こうなった。

立ち尽くす俺の同級生。その同級生の視線に構わずしゃがみ込んで右往左往して俺の心配をしてくる叶。そしてレンガの壁に背中を預け座っている、俺。

まあ、ちよつとこんなことがあつたわけで…。

「ほ、本当に大丈夫なんですか？ご主人様」

「だから大丈夫だつて…そこを退け。立てないから」

叶は意外と心配性だった。どうしようどうしよう、とさつきから口をあわあわと開閉かいへいさせている。

今の状況を言うと、俺は叶のススメで、横断歩道から離れて誰とも知らない人の家の周りにある赤茶色のレンガに背中を預けて座っている。その座っている俺の足を抑えつけるようにして…良い様に言えば俺に覆い被さるようにして俺の顔を覗き込んでるのが叶。

「ホント大丈夫だから…よし、命令だ。そこを退け」

「命令つて…お前何様なんだ？」

…？誰だよ。

そう言おうとした。が、声が出なかった。

今の俺の顔は一体どうなっているのだろうか。目を見開かせ、そいつの顔を見ている。それだけならいいけど…。

さつきまでの状況は大方そんな感じだった。

赤茶のツンツンとしている髪（要は無重力ヘア）。ちなみに地毛だそうだ）。目も髪と同じ色。高校の制服に実を包んだコイツは、俺の同級生。元ライバル。

「…なんでお前がここにいんだよ」

「お前には関係ないさ。…っかその子誰だよ。お前みたいな負け犬には似合わない美少女だけど」

「ああ？テメー、もう一回言ってみろ。その鼻っ面ぶっ飛ばして足も俺みたいに走れないようにしてやるぞ」

はつきり言って、俺はコイツが嫌いだ。コイツも俺と同じ中学の陸上部だった。名は「かやま ゆう鹿山 祐」。

俺が足に怪我を負うまでは、ずっと仲が良かった。でも、怪我をした理由を知った途端、こいつは俺を遠ざけた。近づけば、「負け犬」の一言を浴びせられた。今も、それに変わりは無い。

今では、こいつが高校一番の陸上部員だそうだ。先輩達も追い抜いて、な。

「何回でも言ってやるよ。負け犬野郎。そんで？なんだよ。また怪我でもしたのか？」

そう言つと、俺の足を蹴ってきた。叶は状況が掴めず、俺の横に移動してより一層の困惑を見せた。

「痛つてえなあ！」

叫んで、祐の蹴ってきた方の足を思いっきり蹴り飛ばした。

しかしその瞬間に足に激痛が走り背中を丸め痛みを抑えるように、或いは、痛みごと粉碎しろとばかりに膝小僧を両手で押さえつけた…。こういう姿は、叶に見せたくないんだけどな…。

祐は、俺の反撃を予想していなかったようで多少驚いていた。

「ふん…そんな足で無茶してんじゃねえよ。…そんなことよりさあ、その君。天使みたいだね。ちょっと俺に付き合えよ」

そう言つて叶の腕を強引に引つ張った。

「い、痛いですっ。離してください！」

なんとか反抗を試みた様だが、祐の腕力に叶みたいな小柄な奴が勝てるはずがなかった。

「こんな負け犬より、俺と一緒に遊ぼうぜ。最近ずっと部活で疲れてんだ。疲れを癒させてくれよ」

…でた。こいつの性格の一つ。女たらし。

既に彼女がいるのにも関わらず、いろんな女に話しかけ遊びに誘っている。遊ぶだけ遊んだら、捨てる。それが鹿山祐という人間なのだ。

叶は意外と必死に反抗した。ルックスも良くてスポーツバカな鹿山 祐よりも俺を選んでくれたことが嬉しかった。まあ、祐の顔が怖かっただけという可能性も否めないが…。

「離してください！私はご主人様と夕飯までに家に帰るという用事があるんです！あなたなんかと関わってる暇はないんです！」

「は？ご主人様なあ？」

俺の顔を睨みつけてくる。俺は睨みかえす。顔を俯けた瞬間、コイツに負けたと言うことになりそうだったから。

「お前…こんな子に自分のことご主人様って呼ばせてんのかよ。きめえな」

「ご主人様を悪く言わないでください！」

何も言わない俺の代わりに、叶が反論した。それがホントに意外だった。

「もういい、叶。帰るぞ…」

ここで帰る、というのは敗北宣言も同然だ。だが、このままだと俺とコイツは喧嘩をしてしまうだろう。そして、俺が負けるのは目に見えてる。その喧嘩に叶が巻き込まれれば、叶も怪我をするだろう。

「…っち。まあいいさ。俺にだって天使みたいな存在が来たんだからな」

そう言って祐は帰っていった。

…祐の発言からなんだか嫌な予想をしてしまった。いやあ…まさかねえ…。

「…はあ…、悪いな叶。うし、帰るか」

さっさと帰らないと、母さんに怒られそうだ。

そう思うと、足が勝手に動いて立ち上がることに成功。そのまま

普通に走って家に帰れそうな勢いだっただ。：いやいやいや、そんなに怒られるの嫌が俺。

叶はその俺の姿を見て、やっと安堵あんどの表情を見せた。そして、俺の横に立って手を繋いできた。

ちよつとドキツとしたが、離さなかった。離すどころか、逆に握り返してしまった。

ああ…余計に親子みたい…。まあ、恋人みたいになって思えないのは、叶の容姿のせいだろうな。

## 天使は厄神？

家に帰って母親の第一声は「…どうしたの？」であった。

それもそうだろう。どうやらアスファルトに削られたのだろう家庭用ジャージはビリビリに破れていた。破けたところからは血が滲んでいて、その状況を把握した瞬間から傷があるところから妙に痛みが伝わってくるようになった。

風呂に入るのが大変そうだ。

対して叶は無傷だ。叶を助ける際に、買った服を袋ごと放り投げてしまったがそちらもなんとか無傷だった。

しかし、思い出すと恥ずかしくなる。

なにが真正正銘の俺の大切な人だよ。叶なんて厄を運んできただけじゃないか。

第一に、飯が少なくなった。叶は食事になると、主である俺の命令も聞かずに凄い勢いで食べていき、最終的に俺の分も食べていく。更に、今日はコイツの所為で怪我をした。更にその怪我をした所為で叶が心配という有難迷惑な行為をしてくれたおかげで、あの野郎（鹿山 祐）と喧嘩になりそうになった。

思い出していると、無性に腹が立ってくる。

「なにか苛々してますか？ご主人様」

お前の所為だよ！と強く言えないのがちょっと悲しい。まあ、どうせ強く言ったらコイツは涙目になるだろう。そうすれば、俺はちよつとした罪悪感に苛まれる。

「いや、別に」

「…あの男の人はなんなんですか？それに、ご主人様…足を痛めているのですか？」

はあ…何故思い出したくもないことをコイツは言うんだ。

「…あいつは中学の頃、仲がよかった同級生だ。足は交通事故にあつて痛めた。歩けるけど走るのは無理だ」

そう説明すると叶は血相を変えて謝ってきた。

「す、すいませんでした！そうとも知らずに…あれ？でも私を助けてくれた時は走ってましたよね？」

「ああ、言い方が悪かったな。無理と言うか、激痛が走んだよ。いつもなら当分足は動かせなくなる。なんで痛くなるのかは医者も分からないそうだ」

「そ、そうですか…。本当にすいませんでした！」

「まあ、別にいいよ。あいつが言ってたのは本当のことだし…」

「あいつ…ってというのはあの男の人のことですよ？言ってたことって…？」

「俺は負け犬ってことだよ」

「そんなことはありません！ご主人様は私を助けてくれました！」

「それでも、もう走るなんてことはできない。もう、大会に出ることだって…できないんだ」

それが事実。碌に、リハビリもせず（リハビリで直るかは知らんが）ぐうたらパソコンやって過ごしてきたんだ。十分負け犬だ。

そう言っても叶は俺のことを「負け犬じゃないです」と強く言いきってくれた。

なんだかそれが嬉しかった。

…まあ、「いや、負け犬だ」「いえ、負け犬じゃないです」って  
いう流れが1時間も続かなければもつと喜べただろうけどな。

もう一人の天使？祐からの挑戦状？

夏休みが終わり、二学期が始まった。

叶は転校生としてここに来た、という設定になっている。そして、ここでの俺の呼び方は「ご主人様」から「潤」或いは、「桜木」と呼ぶこととなった。

余談だが、他のクラスにも転校生が来たそう。夏休みに、アイツ…鹿山<sup>かやま ゆう</sup>祐が言ったことが脳裏をよぎる。

『俺にだって天使みたいな存在が来たんだからな』  
嫌な予感がヒシヒシとする…。

しかし、俺の生活は至って変わることはなく、ただ、叶が隣の席になったせいでもいつもの静かさがなくなった。分からないことがあれば、すぐに俺を頼ってきた。

そうやって俺の日々は過ぎていき、ある快晴の日の昼休み。俺と叶は、母親に作ってもらった弁当を広げた。本当は、俺は弁当なんていらなかった。購買の焼きそばパンとかで十分だったからだ。だが、叶が母親と一緒に作ったと言うのだ（殆ど母親が作っただろうけど）。そう自慢する叶の前で、弁当を残す訳にはいくまい…。よって、俺は小食な腹に無理矢理飯を詰め込む形となった。

弁当を完食し、屋上で風に当たる。それが俺の『日常』だ。だが、俺の日常は、壊れた。

叶がいるから、ではない。アイツが来たのだ。鹿山 祐が…。

「よう、負け犬。なんだ？この間の子は転校生だったんだな」

「…なんだよ。用がないなら消えてくれ」

「まあそう言うなよ。用がないってわけじゃあないんだからな」  
意味ありげに笑う。その笑みが、どこか気味わるかった。

だから、視線をずらした。その先には女の子が立っていた。

「…それより、そっちの子はなんだよ」

「お前と同じように、夏休み中に来た俺の天使だ」

「は、初めまして」

長髪を縛らずに優雅に摩<sup>なび</sup>かせる髪は叶と対照的で白だった。悪く言えば…白髪<sup>しろが</sup>。しかし、白髪と言うには綺麗な髪だった。顔立ちは叶より大人だった。

「あー！久しぶりだあ！」

急に叶が叫んだ。なんだよ…言う前に叶はその白髪の女の子の胸に飛び込んでいた。

「うん、久しぶり」

白髪の子もそれに答えた。

「…どうやら、俺等と違って女子組は仲が良いようで…。やっぱり、お前もやったのか。天使」

赤茶の重力に抗っているツンツンした髪を屋上の涼しい髪に揺らしている祐に答えを問う。

「ああ、そうだ。適当にブログを見てたら変な広告があつてな」

やはりか…。あの広告はなんなんだ？法律的にはアウトだろ…。

金払ってないから人身売買に入らないのかもしれないが。そもそも、このサービスに一体なんの利益があるのだろうか。

「話を戻そう。お前、知ってるか？今月にこの学校で最速の人間を決めるイベントがあること」

「…知らないし興味ないな」

事実。興味が無いのはきつと事実だ。俺が興味を持っていい話じゃない。

「そうだよなあ。ああ、そういうのは分かった」

なんなんだかなあ。

「お前、このイベントに参加しろ」

「はあ？」

あまりにも、変な声が出た。素っ頓狂な声、というのは正にこのことだろう。

「恥をかけて言ってるんだよ。五〇メートル走だし、いいだろ。」

あの時のケジメ、付けるよ」

あの時のケジメ。きつと中学の時の小さい大会のことだろう。だが、あの時の俺と今の俺は、別人だ。ケジメを付けるべきなのは、あの時の俺であって今の俺ではない。

「嫌だよ。面倒だ」

「つち。良い機会を与えてやろうって言ってんだぞ、負け犬。なんだ？ 負けるのがそんなに嫌か？」

…ここでキレたら、きつと叶が止めにくるだろう。その光景は俺的に嬉しいことなのかもしれないが、叶に怪我を負わせかねない。

「他の野郎は、俺に負けるのが嫌でこのイベントに参加しない。良ければ、お前とのタイマンになる」

そう言ってから、祐はポケットから紙を取り出した。

その紙をクシャッと丸めてから俺に向かって投げる。そのまま風に流れてしまえ！ と思ったが、どうしてか、その時だけ風が止んでしまい俺の足元まで転がって上履に当たり止まった。

「イベント参加申し込み状だ。出る気があるなら名前書いて生徒会に渡せ」

「……………」

無言で紙を拾い、自分のポケットに入れる。

そのまま祐は何も言わずに立ち去った。

あの白髪の天使さんも叶に手を振り、俺に一礼してから祐の背中を追いかけた。

さつきしまったばかりの紙をポケットから取り出す。

叶が「なんですか？ それ」と聞いてきたが華麗にスルーを決める。

そこには『期限は九月二十日まで』と書かれていた。今日は、九月十九日だ。

## 天使は襲われがち？

今日は日曜。「買い物」ということが大好きになってしまった叶がまだ買い物に行きたいと要望してきたので、この前のショッピングモールに来た。

まあ、買い物というよりは…飯を食いに来たというところだろう。ハンバーグ専門店でデカイ肉の塊を見たときは、食いきれるのかと不安になったが、叶には無用な心配だった。これでけ食べて太るということがない叶の体は一体どうなっているのだろうか。

だが、最近はずっと嫌なこと続きた。今日で、三回目の買い物となるが、一回目はこの前書いた通り車に轢かれそうになった。二回目…先週の買い物では財布ごと金を無くし、泣く泣く家に帰った。そして、三回目の買い物。一体どんな嫌なことが起こることやら…そうこう思ってるうちに、叶がいなくなっていた。迷子か？迷子なら探さなきゃなー、面倒だなー。と、思いながらも探していたその時。

ショッピングモールには、意味がない部屋がある。一応休憩室と称されているが、この部屋に入る奴はなかなかいない（らしい）。現に俺も使用したことは一回もなかった。

しかし、今日は珍しく黒髪のツインテールの子と一目見て分かる、絵にかいたような不良共がその部屋に入っていた。

「…いやいや、まさか。さっきのが叶な訳ないよな…」

不良共と喧嘩騒ぎは嫌だから、他の所を探しにいった。

「いない…」

探し回って小一時間、叶の姿どころか影すら見当たらない。と、なると

「やっぱ、あの部屋…か」

あの不良共があいつを襲う勇気がなければいいけどなあ。

案の定。見てはいけない状況の様な気がした。

だが、想像以上に酷かった。服は所々破れていて綺麗な白い肌が見えている。だが、その肌も微妙に血が滲んでいるところがあった。多分、叶が予想以上に反抗してきたので服を無理矢理破ってしまったおもうと思ったのだろう。しかし、それも上手いこと切れなくて、イラついた不良さん達は肌に爪を立てたって所だろうか…。

「…ああ？なんだ、テメー」

さっきまで、俺が急に入ってきたことにポカーンとしてた不良の一人が妙に冷静に聞いてきた。

「ただの通りすがりの高校生だ。…そいつ、俺の連れなんだよね。返してくんないか？」

「ふざけんなよ！コイツ散々騒いでリーダーの顔に傷負わせたんだぞ！？」

「それがどうした」

「な…！」

握りこぶしを作り喧嘩の準備をする。

「顔に傷負ったくらいで騒ぐなんざ、女々しい奴らなんだな。あんたら」

「テメー…殺してやる…」

言うてから、ナイフを取り出「ええええええええ！ナイフとかありですかー！？」

そう、男が取り出したのはナイフ。刃渡り五センチくらいだろうか。

「…クッソ…柔道経験者なめんなよおおお！」

「はあ……はあ……はあ……」

気付けば、男はいなくなっていた。勝った…？いや、そもそもどうすれば勝ちでどうすれば負けなのかも分からないけど…。

「ま、ご主人様…？大丈夫…ですか…？」

「いってえ…」

膝が痛かった。痛くて、叶の問いに答えることができなかった。しかし見たところ、外傷は無い様で膝がカクカクと笑っている。

「大丈夫だ」

自分の現状を確認してから叶の問いに答えることに成功。

「お前の方が大丈夫じゃないよな。服、どうすんだ？」

言ってしまうと、ちよつと…エロイ…。

「ど、どうしましょう…？」

ここはショッピンモール。服が売ってる店なんて腐るほどある。

「ちよつと服買ってくるから、ここで待ってるよ。ここに来る人なんてあまりいないだろうからな」

「はい、ご主人様」

「…どうする…？」

「どうしましょう…？」

服は買ってきた。だが、着替えはどうするのだろうかという疑問にぶち当たった。

「…俺は外に出てるから、着替えちゃえよ」

「ま、待つてください。部屋の中にいてください…怖いんです」

怖いも何も…。だが、袖をつまんで甘える様な声で言われると、遂、甘やかしたくなる。

「分かったよ。俺は向こう見てるから、さっさと着替えるよ？」

「は、はい」

服が脱げる音が聞こえる。…あれ？なにこれ、ちょっとヤバくね？  
なんだこのシチュエーションは。

やばい、心臓がもたない。誰か、丈夫な心臓持ってきて。  
そして、数秒後。

「お、終わりました」

「お、おう」

着替えが終わったと分かってても、なんか叶を直視できない。  
「か、帰るか」

なんか…空気悪っ…。

## 天使は猫？

「あんだ、ホントいろんなことに巻き込まれやすいわよねえ」  
ラーメンぞぞぞ。

「俺じゃなくて叶が巻き込まれやすいんだよ」  
納豆まぜまぜ。

「あうう…す、すみません」  
目玉焼きパクパク。

何をどうしたら、夕食がこんなにバラバラになるんだろうか。しかも俺の飯、納豆と白米だけかよ。泣かせてくれるじゃねえか。時計を見ると指す時間は七時三十分前。

その後、無言でさっさと晩飯を食い終わし風呂に入った。

短めの髪を簡単に洗って湯船に浸かる。もしかしたら叶が入ってくるかもしれないという俺のキャラに有るまじき間違った期待をしていた。が、親がいる家でそんなハプニングが起こるはずもないという結論に行きつきさっさと風呂を出ることにした。

「…どうするかなあ…」

俺の部屋の勉強兼PC用机の上にはクシャクシャになった申し込み用紙が置いてある。

祐の言うとおり、祐以外の参加者がいなかったため申し込み期間を延長させたらしい。次の締め切りまでに参加者がいなかったらイベントは中止だそうだ。

締め切りは九月二十六日の月曜日。所謂、明日だ。

あれ、所謂の使い方間違ってるね？いや、合ってるか？…俺の国語力はとてもヤバイ。結構勉強してるんだけどなあ…。やはり、世の

中には無駄な努力というものがあるらしい。目標もなくただ勉強をする。それこそ無駄な努力だが、それ以上に、覚えることもできない勉強をやりまくる。これ以上の無駄な努力というものはないのではないだろうか。

閑話休題。

とりあえず、俺は今例のイベントに参加するか参加しないかと言うシンプル、且つ複雑な悩みを抱えているのだ。

参加しなければ、より一層負け犬面が強くなるだろう。

かと言って参加しても、負けるのは目に見えている。

「だー！どうすればいいんだー！」

「にゃ！？ど、どうしたんですか…<sup>マスター</sup>ご主人様」

俺のベットで寝転がっている叶が俺の叫びに吃驚して飛び跳ねていた。なんか猫みたいで可愛かった。これまでに何回か、こいつのこと猫みたいだなと思ったことが何回かある。…こいつ、前世は猫なんだろうな。

「いや、なんでもない。すまん、急に大声だしちまって…」

「いえ、なにか悩みがあるなら言ってくださいね。私、出来る限り力になりますから…」

「…おう」

叶に相談したらややこしい事態に巻き込まれそうだから、その選択肢は始めからないけどなっ！

とりあえず明日考えることにして、もう寝よう…と思ったが、いつもは母親の部屋で寝てるはずの叶が俺のベットで寝てしまっている。…あの短時間で眠るとか、寝付きよすぎだろ。

仕方ない、とベットの側面に背中を預けて寝てしまうことにした。

寝心地は…最悪だ。

## 天使の一押し 俺の無駄な努力

さて、努力の話をしよう。

努力とは、人生に一度はしなくてはいけない必須事項。努力無きして人生にあらず。

しかし、無駄な努力というモノもある。例を挙げれば、前話だと思うが『頭に入ることもない勉強をやりまくる』。『見ず知らずの女の子を、何の得も無いと知っておきながら車に轢かれそうなところを助ける事』、これも無駄な努力。逆に損をしてしまったわけだし。

この世に損をする努力など無い。つまり無駄な努力は、努力とは全くの別物。努力とは別の、人生には不必要なモノ。

これから俺がしようとしていることは、果たして、努力なのか。それとも、無駄な努力なのだろうか。

九月三十日金曜日。晴れ渡る空からは、もう秋だというのに何故か暑苦しい日光が降り注いでいた。その暑い空気が、なんか変に肌に纏わりついて嫌な気分になる。これから走るというのに、こんな気分で大丈夫だろうか。

汗が校庭の砂に染みる。

俺の横には祐がいる。俺のことは見ないで真っ直ぐ前を向いていた。中学の頃、俺はその祐の真っ直ぐ先を見た目が好きだった。何故、そんな目ができるのだろうかと思議で堪らなかった。

そして、俺が今、ここに立っていられることも不思議で堪らなかった。

本当は、走る気は無かった。ただ、申し込み締め切り日の登校中

にヤケに敏感に俺の悩みを感じ取った叶に言われた。

「ご主人様…私は、あなたの走っている姿が見たいです。頑張っている姿が見たいです。あの時、私を助けてくれたご主人様、カッコ良かったです。私にもう一度、あの姿を見せてくれませんか？」

俯いていた叶の紅い目が突然、俺の目を真っ直ぐに射抜いた。

「さっきまでと言っていることが違くなってしまいかもしれません。

あなたは、あの時の決着というヤツを付けるべきです。走ってください…。私の為に。あなた自身の為に」

叶の、こんな真剣な眼差しを見たのは初めてだった。

だから、走ろうと思った。叶には悪いけど、俺の為じゃなくて…叶の為に。

いいじゃないか。無様な姿を晒してやろう。この世界に、俺の足は走ることではできない！と叫んでやろうじゃないか。それは笑われるだろうか。いや、啞然とするだろう。「何を言っているんだ」という目で見られるだろう。だが、それがどうした。ホントどうした。俺は走る。走れなくても、歩くことはできる。たとえ足が無くなるうとも、歩くことができなくなっても…進むことはできるのだから。「位置についてください」

校庭に引かれた白い線に足を揃える。

「用意」

クラウチングスタートの構えを取る。

「…！」

スタートの声が聞こえなくて、口パクしているのかと思った。が、祐は走り出そうとしていた。

しまった…！

出遅れてしまった。出遅れてしまった理由は二つ。

スタートの声が聞き取れなかったこと。

そして、足に力を入れた瞬間走る激痛に恐怖を感じたことだった。  
「あれ？」

小さく声が漏れた。

走れた。いや、まだ走ってはいないが、力を入れた瞬間に激痛が走らなかった。

なんだか懐かしい風景が見えてくる。

周りの風景が一瞬真っ白になり、その後には中学の校舎と校庭が俺の目に映った。

「

！」

最早、声にならなかった。ただ、叫んだ。叫んだという表現が適用されない声にならない叫び声で。

目に映るのは、中学の時に一緒に走っていた後姿。祐だ。祐が俺のことを抜き去った日の校庭だ。その校庭では、偶にはいいかと手を抜いて祐を一位にしていた。

だが、祐に怒られたっけな。

なんで、真剣にやってくれなかったんだ、と。俺はお前の背中を見て走るのが好きなのに、と。

だからもう怒られないように、全力で走ることにした。五〇メートルってこんなに長かったっけと思えるほど長い時間。視界の端に、叶が映った気がした。一瞬視線を送ると、そこに立っていた。

中学の校庭に入ってきてしまった黒ネコを思い出してしまった。

あの黒ネコは今元気になっているのだろうか。それを考えるのは、走り終わってからにしよう。

校庭の風景が流れていく。懐かしい感覚。足で地面を蹴り飛ばしている感覚。

そして、一体どれくらいの時間が経ったのだろう。

ゴールはまだ見えない。体感時間はもう三〇秒を超え、一分を超過しようとしていた。

そして、追いついた。アイツに。高校最速と言われた祐に。

そのまま、祐の顔を見ないまま、真っ直ぐゴールを見たまま、走りぬけた。

「うおおおおおおお！」

気付けば、校庭は大喝采していた。さっきまでいなかった生徒が口笛まで吹いて。

俺は四つん這いの格好になっていた。久しぶりに走ったからだろ。心臓が痛い。息が切れて、目の前が真っ白になる。

俺は四つん這いの格好から、仰向けに校庭に寝転がった。両手を投げ出して、大の字になり呼吸を整える為に、暑苦しい空気を肺いっぱい吸い込む。

太陽が何かによって遮られた。…叶だ。

「御苦労さまです。ご主人様♪」  
マスター

疲れを癒してくれそうな笑顔のまま、手に持ったタオルで俺の顔の汗を拭ってくれた。

「…叶……ありが、とう、な」

息を整えてから言おうとしたが、それを待てなかった。早く、言いたかった。

「…何がですか？」

「俺を、走らせてくれたこと、だ。スッゲー気持ちいい！」

右拳を突き上げて太陽を殴ろうと思った。けど、届かなかった。当たり前だけど。

「…よう」

「…おう」

祐が俺の顔を覗いてきた。叶はまだ警戒している様だが…警戒の仕方が猫そのものだ。なんだか服の中では毛を逆立ててそう。

そんな叶は放っておいて…

「…ツハ！どうだよ。俺の華麗なる走り捌きは！」

「走り捌きって…その使い方、合ってるのか？」

「俺の国語力、お前は知ってるだろう？」

「…そうだな、お前はそうであってこそのお前だ」

叶は空気を読んだのか、そこから一時期離れた。首だけ捻って見ると、ペットボトルを持って走っていつていた。…水道から水を持つてくるつもりか？てか、元々入ってた水はどこにいったよ。

その叶が退いた場所に俺と同じように祐が倒れ込んだ。

「…お前、まだ走れるんじゃないか。足の痛みはどうしたよ」

「しらねえー。なんか今日に限って痛くなんなかった。…神様が、俺にチャンスくれたのかもな」

「おいおい、神様とか…お前らしくないぜ。それにチャンスを与えてやったのはこの俺だ」

「じゃあ、お前が神様だ」

「止めるよ、照れるじゃねえか」

いつ以来だろう…、こんなやり取りするのは。

「お前まだ陸上部、続けられるんじゃないか？」

「無理言っつなよ。こんな足じゃあ、歩くのがやっと、だ。やるなら競歩だな」

「あんな地味な競技…地味過ぎて発狂しちゃう」

「…はは、そーだな」

そう言った瞬間に、叶の顔が目の前に飛び込んできた。

「ご主人様…これ水です。飲んでください」

「ああ、…叶、マジでありがとな」

上体を起こして叶の手からペットボトルに入った水を受け取り、一気飲みを試みた。

「あ、オイ。俺にもくれよ」

…仕方ない。一気飲みの試みは失敗。だがまあ、友人との飲み物の回し飲みって言うのも素敵な青春じゃありませんか。

そうして、いつしか校庭の生徒達の喧騒も何所かに消えていった。教室に戻ると、何か変に歓迎された。

「お前え…目立たないヤツだと思ってたのになあ」

「うんうん、女の子に興味なさそうにしてたもんねえ」

「ムフー」

最初のセリフが見覚えがある（当たり前だ）男子生徒。

最後の二つのセリフは、女子だ。勿論、見覚えはあるが名前は知らない（ある意味異常だ）。

「なんのことだ？」

「なんのことって…照れなさんなつて！叶ちゃんと…デキてるんだろ？」

そう言つて小指を立てた。

「はあ！？」

「だつてそうだろう？あんな風に構つてもらつといて何の関係も持たないつて言うのか？？」

「私たちは主従の関け「おいこらデメーはなにを言おうとしてやる」

「何つて事実を少々…」

「その事実は危険だから伏せておけ…」

そんな感じで男子には小突きまわされ女子には「キヤーキヤー」

言われで、教室から逃げたくなった。

「でも、…悪くはないな」

「んあ？」

いやなんでもない、と言つてから放課後になつてしまった。今日は教師がいないから「さよなら」もなしだ。まあ、元々「さよなら」なんて言つてる礼儀正しい生徒は少ないけど。

叶と家に帰る途中、ふと思つた。

今回の無駄な努力は、意味がある無駄な努力だったな。

うーん、でもこれ…結局叶の為じゃなくて俺の為に走つちまった

…のかな？

天使は心を開かない。

「…なあ、叶ちゃん。そろそろ警戒しなくてもいいんじゃないかな？」

俺と祐、そして叶で下校という開放感あふれる時間を過ごしている時に祐が言った。

しかし、叶は俺の背中に隠れて「うー」と唸っている。猫だ。コイツ絶対猫だ。

「はあ……」

「自業自得だろ。あんなことされりゃ、誰でもこうなるって」  
猫化するしないは別として。

「だからあ。あれは、潤がまだ甘ちゃんだったからやる気を出させようとしてだな…」

「逆にやる気をなくしちまったけどな。足も痛かったし」

「…すまん」

「まあいいよ」と軽く言ってから背中に隠れている叶に話しかける。

「おい、そろそろいいだろう？許してやれよ」

「ご主人様の命令は絶対です。しかし、ご主人様の敵は私の敵でもあります。なので、どうしようか悩んでいます」

敵でもなくなった祐に敵対心を持っている理由は、強引に腕を引っ張られたのがトラウマになったからだろ。だから悩んでいます、なんて言っておきながら本当のところ仲良くする気は更々ない様だ。「諦めろ、祐。コイツは猫だ。警戒したらなかなか心を開いてくれないぜ」

そう言つと、祐は「猫か…」と顎に指を当て考える人の格好になる。それから叶の顔を一瞥してから俺の顔を見る。

「確かに、その比喻は的確に的を射ているな」

「誰が猫ですか、誰が」

「いや、お前以外いねえだろ」

「ご主人様まで…」と俯いてしまふ。…猫、というのは可愛い動物だから喜ぶべきじゃあないのか？

「おっと、ここまでだな」

俺の家のすぐ近くの十字路で祐は右に曲がり、そこからちよつとの距離歩かなくてはいけない。まあ、陸上部ならそんな距離どうってことないのだろうけど。

「じゃあな、潤。叶ちゃんも、また月曜日に「うにゃー！」うお！？」

ひでえ…。叶は祐のセリフを遮り、そのまま祐を追っ払ってしまった…。

「さ、ご主人様。帰りましょう」

「…そうだな」

その笑顔はなんか怖いぞ、とは言えない俺だった。

「現実」とは一体なんだろうか。

現実とは非幻想の塊。

だがもし、現実には非現実的なことが起きたら、俺は一体どうなるのだろうか。

その非現実的なことも、現実の一端に過ぎないと諦めるのか。

そんな非現実的なことはあり得ないと、頭からその記憶を消してしまうのか。

例えば、だ。もし皆さんの目の前に降り立った天使が甘えた声で迫ってきたら、どうします？

俺は自分の部屋に入ってから両手を万歳させて言った。

「第一章、終わり！って感じだな。…さて、第二章の始まりだ」

叶は首を傾げていた。

## 天使は暇…俺も暇

天使だなんて大層な通称を持つ少女と会ってから、既に四ヶ月が経っていた。クリスマスがある十二月。

外はとても寒く、常に刃物を突きたてられているように肌が痛い。この四ヶ月では文化祭や体育祭なんていうのもあった。が、それはまた今度、ゆっくり話すでしょう。

叶は女友達も作れたし、祐との仲は…まああまり変わらずか。心配でありながら、何故か安心してしまうことは叶には祐以外に男友達がいなかった。…祐も友達と言えるかなり難しい立ち位置だが。

第二章が始まってから、これだけ日が経ったというのに…なにやら進展がない。

いや、そもそも人生は小説の様に出来ていない。故に、進展というモノが何を指す言葉なのか分からないのだが…。言ってしまうば、誰かに報告する程大事なことが起こっていないのだ…。

俺の部屋の暖房器具が静かに空気を暖めてくれる今日この頃。叶と俺はだらけていた。

俺はベットの側面に寄りかかって、叶は俺のベッドで布団に埋もれている。

マスター「ご主人様あ、寒いですう…」

「知らん」

マスター「…ご主人様の心は冬の空より冷たいですう……………」  
やかましい。

「マスターの体で温めてくdashゃーい」

「…酔ってるのか？」

もしくは寒過ぎて頭がイカレタカ。

「冷蔵庫にポカリ入ってるから飲め」

「ますたあの肌は心と同じで冷たいのですねえ」

え…それは、俺は死んでるって言いたいのか？

そもそも俺のベットの布団に包まくるっておいて何を言ってるだ、コイツは。

「よし、ご主人様<sup>マスター</sup>…出かけましょう！」

布団に包まったまま、ベッドの上に立ち妙に笑顔で俺に散歩の話を持ちかけてきた。

「…そのまま行くのか？てか、どっかの電波さんみたいになってんぞ」

「もちろんですとも！…電波さん？」

「…そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

敬語はどうした。いや、まあその回答で正解なんだけどさ。

「散歩にはいかねえぞ。散歩するより部屋でゆったりしてた方が暖かいしなあ」

「…そうですか。まあそれもそうですねえ」

ダメ人間二人現る。だが、まあ…出掛けたくないのは事実だ。

「出掛ける」の単語で祐の家に行こうかと思っただが、案の定、あいつは一日中部活だ。

「ちよつと真剣な話なんだけどさ」

「はい？」

「お前さ、誰か好きな奴とかいんの？」

「…さあ？どうなんでしょうね」

流された。まあ、それもそうだろう。叶の男友達関係が祐と俺以外にいないのならば、好きな奴なんかいるわけがない。

…それは当たり前なんだが、その当たり前な回答にちよつとムッとなってる自分がいた。

「俺のことは、好きじゃあ、ないのかよ」

俺は何を口走っているんだよ。散々酷いこと言ったりやってきておいて「好きですよ」あれ！。

首を後ろに捻り、叶の顔を見える。なんとなく頬が赤くなっている気がしたが、それは、所詮「気がした」だけで…いつもの叶の顔がそこにあつた。

「私はご主人様マスターのことが好きですよ」

猫を思い立たせる顔でそんなこと言われても…。

しかし、そう言われるとなんか意識してしまう。布団からはみ出したツインテールの一部。大きなルビーという表現が合いそうな、紅い目。服から見える隠れきれてない白い肌。

顔立ちは幼いのに、どこからか、「女」というオーラを醸し出していた。

多分それは、好きですと言われたからだろう。人は好きですと言われると嬉しい生き物だ。そして、嬉しいからこそ、その好きですと言った人のことを意識してしまう。それは人間として当たり前なことだ、と自分のことを真剣に分析してみる。

…しかし、もうすぐでクリスマスか。

「なあ、叶。なんか欲しいモノあるか？」

## 天使との旅行

「旅行に行こうぜ!」

祐がなんか言いだしたから無視しようと思うんだ。異論はないな? オーケイ。

「.....」

「...旅行に行こうぜ!」

「.....」

「.....」

「...旅行に行こうぜ!」

「なんで」

無視しきれなかったことが非常に悔しいです。

「なんでって... お前と千冬ってあまり話したことないだろ? だから話をする機会を作ってやろうと思ってね」

「チフユ? 誰だそれ」

「俺の天使ちゃん」

ああ、あの白い女の子ね。

「あとは、俺と叶ちゃんの仲を修復することだわな」

それは未来永劫、不可能なことの一つだと思うぞ。

「まあ、旅行自体には賛成できないな。叶と行ったらどんな面倒事に巻き込まれるか分かったもんじゃない」

また、絵に描いたような不良に襲われるかもしれないし、旅行先で迷子にでもなられたら堪ったもんじゃない。

ああ、状況説明を忘れてたな。

今は昼食中だ。なにやら叶とあの千冬って子は二人で学食にいった様子。屋上で弁当食ってて「ちょっと寂しい」と思ってる所に騒がしい奴が来た。コイツがくるなら一生寂しくて良いと思つた。

「まあ、別にいいけどな...行くとしたら、いつになるんだ?」

「お、旅行賛成してくれるか」  
だから賛成はしてねえって。

「ま、冬休み中には行きたいな」

「…クリスマスにでも行くか？」

「お、いいねえ。なら青森とか北海道とか行こうぜ。雪降る可能性高いだろ」

ホワイトクリスマス。なかなかロマンチックだ。こっちの方じゃ、雪なんてあまり降らないし。

そんなこんなで、旅行に行くことになった。

…いや、マジかよ。

平和だなあ、と思った。

露天風呂がある旅館に行くため電車で揺られて数時間が経過した。隣に座る叶は俺の肩に頭を乗せて寝てしまっている。最高に鬱陶しい。

祐も窓側に頭を垂らして寝ている。窓を開けてやりたいと思った。

「それで？争いが無ければ平和もない、と」

「はい、あなたは祐さんと違って理解力があるようですね。気に入りました」と白い天使、千冬が口に笑みを浮かばせ言う。

これが話してみるとなかなか変わった子で、俺と話が合う。だが、祐はこの手の話を好まないらしく、長い間我慢していたらしい。

「だが、その逆も然りだ。平和が無ければ戦争も無い。平和が無くなる、という表現はあまり良くないと思うけどな」

「…？」

「平和が無くなるんじゃないくて、人間が気付けなくなっちゃうんだ。今が平和であるという事実」

「ああ、確かにそうですね…だから更なる平和を求めることでしょうね。その内平和が何なのか分からなくなってしまう」

「そうだな。平和が全てとなれば、平和がなんなのか分からなくな

る。しかし、平和が全てとなってしまうえば人間が人間に殺されることはなくなる。…この世、最大の二酸化炭素削減方法がなくなってしまう」

「確かに、人を殺すことそれ自体は環境に良いことですからね」  
さつきから、こんな話ばかりだ。旅行だというのに、こんな話から始まっていいのだろうか。

バスから下りて、先に下りた叶の隣に立つ。

「ご主人様」

「なんだ？猫」

「猫じゃないです！」

これまでに何回か繰り返してきたやり取り。

「んで、なんだ？」

叶の旋毛を見ながら言う。

「…凄いところですね。高級感があふれ出てます」

確かに、凄いところだった。祐が予約を取った旅館はとてつもなくデカかった。

「ああ、そうだな」

適当に相槌と肯定をして、旅館をもう一度眺める。

どこをどう説明すればいいのだろうか…。無理矢理に説明すれば、それこそアニメに出てきそうな高級旅館だった。

「高級なのは外見だけさ。中身…というか、値段はそんなでもないよ」

…祐はブルジョワなのか？それとも、実際に安いのだろうか。

大きな荷物だとかは先に旅館に送ってある。今俺が持つてるリュックには、暇になった時にでも読もうと考えて持ってきた小説が数冊入っている。それでも読書は結構好きな方なのだ。

「…なんでこんな高級そうなのに値段が安いのでしょうか、ご主人様」

「…お前は、今あそこに歩いてる人の存在理由が分かるか？分からなくてはいけないのか？」

「うう…。そ、それとこれは別です…」

「まあ、人の存在理由なんてないんだけどな。存在理由が無いモノがする行動の理由はないんだよ。だから、いちいち理由を探ろうとするな」

「はあい…」

「…まあ、高級そうなのに値段が安い理由というものが分からないから適当に誤魔化したただけだけどネ！

「さて、中に入ろうぜ」

祐を先頭にして、旅館の中に入っていった。

## 天使は虫が苦手。

旅館に入ってから驚いたのは祐がここの常連だということ。まあ、親が旅行好きなのだから本当は驚くべきことじゃあないのかもしれない。…けど旅館の常連って…。

「おお、これはこれは…部屋まで高級そうだな」

和室、というものはどこか懐かしさと温もりを感じるモノがある。真中に置かれたテーブルにも、龍の彫が施され高級感を漂わせている。富士の掛け軸や、壁。更には座布団までも高級そうだった。しかし、適当に見ると、普通の部屋にしか見えない。この部屋はどこか高級の漢字二文字が見え隠れしていた。大雑把に言えば、どれも高級の言葉で形作られている所為で、普通の部屋に見えてしまう。そんな感じの部屋だ。…いや、この説明ではどんな感じの部屋なのかまるで分からないが。

最早、感嘆せざるをえない。

叶は和室というものを見たことが無いのか、不思議そうな目で部屋を見回していた。いや、さすがに和室は見たことあるか。

「私、こういう部屋始めてみました」

日本の文化はどこへ行った。

「そう、なのか…。どうだ？初めての和室は」

「和室というのですか。なんか落ち着きます。温かみがあるというか…」

ふむ…まあ、そんなもんだろうな。和室の感想なんて。

祐はさっさと手際よく鞆から服を出したり、布団の確認をしたりしている。…さすが旅行好きの息子である。

「今日はもう遅いから寝よう。クリスマスは明日…あれ明後日だったけ？」

コイツはもう時間とか曜日の感覚が狂ってる様だ。海外に旅行というわけでもないのに…。

「クリスマスは明日でクリスマスイブは明後日。今日が二十二日で明日が二十三日、明後日が二十四日だ。そして今の時間は四時。寝るという時間じゃねえだろ」

「おお、そうか。お前頭良いんだな」

「ははーと暢気に笑ってるお前の頭が悪いんだよ。そもそも何日なのか覚えてるから頭がいい訳ではないだろう。」

「じゃあ、明日は町に出て買い物しようぜ。明後日はとっておきの場所に招待するから」

とっておきの場所。

ちよつと気になったが、何も聞かないことにした。自ら楽しみを減らすなんて愚か者のすることだ。

「今日は各自、自由行動にしようぜ。一足先に町に出ても良いし、旅館で過ごすのもよし。てな訳で解散！」

…。

全く、適當すぎる。まあ俺自身、今日は疲れた。数時間電車に乗って肩に叶の頭乗せて、更に千冬と肩が凝りそうな堅苦しい話をしたのだから、疲れて当たり前なのだろう。

確か、旅館に中庭があるらしい。そこには、一本の大きな木とそれを囲むようにして茂みがあるそうだ。ちよつと気になったから、行くことにした。

なかなか、いい場所だ。俺たち以外の旅行客が、時折騒がしく通り過ぎていくのはかなり鬱陶しいが、仕方ないだろう。

さっき俺達を歓迎してくれた旅館で働いてる人に許可を貰い、中庭に足を放り出し座って本を読んだ。

この本を読むというのは、なかなか有意義な時間だった。読める本は「生と死―正と止―」。俺には到底理解できない内容だが、その理解出来ないというのが気持ち悪い、しかし、どこか嬉しいと思ってしまう。

例えば、タイトルの「―正と止―」も理解できないことの一つだ。著者曰く、「生と死」の漢字を違くしてみる。すると「正と止」になる。正と止は形が似ている。故に生と死は似ている。

全く理解できない。俺には正と止は一本の線が無いだけで、形はほぼ同じですと言ってる様にしか見えない。それに漢字を変えるのなら「性」と子」にだってできる。だから、形が似ているから意味が似ているなんてことは、決定できないと俺は思う。

「何をしているのですか、ご主人様」

声のする方を振り向かなくとも分かる。俺のことを「ご主人様」なんて呼ぶのは一人しかいないからな。

「何もしてないよ。ただの退屈凌ぎだ」

「もう何時間もここで退屈凌ぎですか？」

「…？」

見れば、外はもう暗かった。

なるほど、本とは良いモノだ。時間の流れすらも超越してしまう。「そろそろご飯の時間なので、呼びにきました。ご主人様も浴衣に着替えてはどうです？」

見れば、叶は浴衣を身に着けていた。

「なんだ？もう露天風呂入ったのか？」

「いえ、まだですけど。千冬さんと部屋で浴衣を見つけたので来てみただけですよ。あの人も浴衣ですよ」

あの人…？ああ、祐のことか。ホントに嫌われたもんだな、アイツ。

「まあ、着替えた方が雰囲気であるしな」

そう言つと、俺は開きっぱなしにしていた本を閉じ、立ちあがった。瞬間、悪寒が走った。

なんて言つと、怒られそうだな。

叶が腕を組んできたのだ。恋人同士がするように。

「いいですよ、こういうの」

「…そうだな」

殆ど投げやりにそう言い放った。まあ外見が小学生とは言え（ちなみに身長は一五〇センチだそうだ）、コイツも女の子だ。ちょっとくらい楽しんでもいいじゃないか。…。

「……………」

「何か考え事ですか？」

「いや、大したことじゃあないんだけどな。ただ、この幸せってヤツを、この世の不幸背負ってるヤツに分けられたらいいな、と。そう思っただけだ。…結局、戯言以外の何物ないんだけどな」

「…何かあったんですか？」

「中庭の岩にテントウ虫が大量に貼り付いてたこと以外には特に何もなかったよ」

「…うえ」

叶は虫が苦手な様で、ちょっと嫌そうな顔をした。

でも、あれはホントに驚いた。虫嫌いって訳でもない俺でも、気持ち悪いって思っちゃったし。

**天使は虫が苦手。 (後書き)**

今更ながら、サブタイトルが適當すぎるなあと思う。  
なんだよ、天使は虫が苦手って。内容にあまり適してねえぞコレ。

## 天使の大食い…

一度部屋に戻り着物に着替えてから叶と向った先は宴会場だった。  
え？何故、宴会場？

俺はてつきり自分の部屋で食うモノとばかり思ってたから呆氣にとられた。

「この旅館はな、お客様同士でコミュニケーションができるように  
って飯は客全員で食べることになってんだ。まあ、適当に女捜して  
ナンパでもしようぜい！」

「ナンパ云々は置いといて…。へーえ、飯を客全員でねえ」

なんだか落ち着かないというのが本音だ。

…話が急激に変わるが、俺の隣の小柄なツインテール猫さんが何  
やら奮闘している。

「…なにしてんの」

「足が痺れちゃって…」

ああ、そういうことか。

「……………」

足ちよんちよん。

「うひゃあい!？」

おお!？凄い反応!まるで猫だあ!…まあそりゃそうか。

「ご主人様<sup>マスター</sup>…殴りますよ?」

「…ゴメンナサイ。調子二乗リマシタ」

ホントに殴ってきそうな感じがしたから、早めに謝っておくこと  
にした。それを横目で見ていた祐に笑われたのは言うまでもない。

そうこう言ってる内に豪華な飯が運ばれてきた。

飯のメニュー?自分で考えてくれ。まあヒントではないけど、見  
た目はアレだ。やっぱアニメに出てきそう。

中居さんが前に立って「いただきます」を言うと同時に、皆も「  
いただきます」と一斉に言ったことに驚いた。俺と叶は、呆然とし

てしまい、言うタイミングを失ってしまった。

とりあえず、一口だけ。

「…うめえな」

と、当たり障りのない感想を述べる。まあ、旨すぎてこれ以外に言葉が出なかったただけだが。

料理の知識も少なく冷凍食品だけで満足してた俺には刺激が強い旨さ。

「だろ？ここの飯は日本一なんだぜ」

冗談の様に笑いながら祐は言ったが、これが日本一の飯であると言われて信じない奴などいるのだろうか。それこそ、味なんてどうでもいいと思っていたこの俺に戦慄が走るほどに。あまりに美味すぎて、これは俺が食べて良い物なのかという疑問に囚われてしまう。

…が、気付けば、俺の目の前から飯は既に三分の一まで減っていた。まあ、犯人は分かっているけど。

「……………叶？」

「……………」

「お前にはちよつとばかりお仕置きが必要かな？ん？」

「うう…すいません…で、でも、ご主人様が悪いんですよ！日頃から私にいろんな悪戯するからっ！」

ちよ、そんなこと大声で言うな。

「イタズラって、お前…まさか……………」

「…潤さん……………」

祐までなら未だしも、さっきまで無言だった千冬まで…。

「おいこら待てや、何を勘違いしてんだ。悪戯はそういう意味じゃ…止める！そんな目で俺を見るな！お前も勘違いされる様なこと言うな！」

「勘違いじゃありません。事実です」

ああ…俺の人生が狂っていくような気がするぜい…………。

あー周りの見知らぬ人からも視線が心臓に突き刺さるようだ…。

「全く、どんな飯だよ。せつかく旨かったのに…」

部屋に戻って尚、俺は文句を言っていた。それもそうだろう。せつかく旨かった飯を食われた挙句、あの発言。文句を言わない訳がない。

「まあまあ、そろそろ許してやれよ」

苦笑しながら祐が俺を宥める。が、

「飯は取られてその上、俺にあんな恥をかかせやがって…」

「…なあ、中庭いかねえか？あそこなら落ち着くだろう」

それは良い、と賛同して中庭へ向かった。

## 天使の出番、なし

本日二回目の中庭は、さつき見たよりも深い闇に包まれていた。それでも、旅館の電気に照らされている大きな木はどこか光る粒子を振りまいているように美しかった。

「…んで、なんでここに来たんだっけ？」

俺の問いに、祐はちよつと間を開けてから答えた。

「いや、雰囲気つてのも大事だろ？ちよつと真剣な話しをしたくてな」

そのセリフに見合った、真剣な眼差しで祐は大木を見ていた。懐かしいと思った。いつの日かも、こんな眼差しの祐を見た気がした。

「俺さ、ホントバカだよなあ！」

真剣になったかと思えば、今度は急に大声になった。

「お前がバカなのは、中学の時からだろ」

俺は冗談めかして言ったが、祐は「そうだな」と微笑しながら言った。

「中学の時さ…お前、わざと負けたくれたときあっただろ？」

「ああ、あったな。あんときは、お前にこつ酷く怒られた」

「そりゃあ、怒るさ。手を抜かれて勝つても嬉しくねえし、屈辱以外の何物でもない。そんなこと、お前は知ってると思ってたからな」  
実際、知っていた。それでも俺は手を抜いた。

俺は無言で祐の言葉を待った。

「そんな時からさ、俺、ちよつとお前にある疑いを掛けちまったんだよな」

「…どんな疑いだ？」

「お前は俺を友だと思っていないんじゃないだろうか」

「…そりゃあ、酷い疑いだな」

「だろ？ホント、バカみたいだ。いや、実際バカなんだろうけど

さ」

祐は何故か笑顔だった。今、俺はどんな顔をしているのだろう。ちゃんと真剣な顔をしているのだろうか。

「それでさ、お前と勝負できる最後の小さな地元の大会。その前々日にさ、お前が交通事故にあったとき。俺何思ってたと思う？」

「…俺がお前に負けるのを恐れてわざと交通事故にあった、とかか？」

「ああ、最終的にはそんな風に思ってた」

それは初耳だった。祐は胡坐をかいて、星空を見上げた。

「最初はな、お前は俺を勝たせるために交通事故あったんだと思ってた。だけど、途中から俺に何があったのか俺自身も分からない。ただ、お前は俺に負けるのが怖いんだ。だからアイツは負け犬なんだったって言った」

なるほど、と小さく呟いてから、祐と同じように空を見上げた。

「そんな風に思ってたなら、この前、足を怪我してて動かない筈の前にあつさり抜かれちゃった。だから分かった。コイツは、負けるのを恐れる様な奴じゃないってな」

「……そうだな。負けるのなんかより、足の激痛の方がよっぽど怖いさ」

「それでスタートが遅れたのか？」

「…分かったのか。…けど、あの時は痛くならなかった。結局は、気持ちの問題なのかもな」

なにか、気持ちが楽になった気がした。それは多分、コイツが俺に対して負け犬だと言っていた理由が分かったからだろう。実際、夏休みに入る前…いや、叶に会うまでの俺は負け犬も同然。このまま二トになるんじゃないかと思うところまで、部屋に引きこもっていた。理由は、歩きたくなかったからだ。もしかしたら、走らなくちゃなくなるかもしれない、とか。

もう一つ、理由がある。外に出たら、走ってる奴らがいる。それが羨ましくて、妬ましかった。それだけだ。

だけど、今は言っておかなくてはいけないことがある。

「…なあ、祐」

「ああ、言いたいことは分かってる…」

「……寒っ！！」

寒いのだ、さつきから。冬の夜はとても冷える。祐と俺は気持ち悪く見つめ合って、それから同時に笑った。

ああ、思い出した。祐のあの真剣な眼差しを見た日。あれは、俺がわざと負けたときに見た目だ。怒ってるのかどうなのか分からなかった。いつもの祐からは想像もつかない目だったから。

…もうちょっとロマンチックな思い出だったらよかったんだけどなあ。

まあ仕方ないか。俺は夢見るロマンチストって訳じゃあないんだからな。

無駄に疲れるってのはこういうことを言うのだろうと気付いた瞬間

タイトルなげえよ！…いや、なんのことだ。分からん。何かに取り憑かれたかの様に突っ込んでしまった。

あまりの寒さからか、小走りになっている祐を大股で俺が追いかけるという形で部屋に到着。だが、少々入りづらい状況にあった。

「あつ…だ、だめ…」

「叶、だったよね。今の名前。いいじゃん、前まで良くやってたんだから…」

「ち、違うのっ…そうじゃ、なくて…んっ」

「じゃあ、なあに？」

「き、気持ちよすぎて…ダメエ…」

…なんだ。この状況。この襦一枚向こうは、さぞ、美しい(?)光景が広がっていることだろう。

「(なあ、祐。お前、ちよっと部屋の中見てこいよ…)」

「(お前は見て来れるのか？自分ができもしないこと、人に頼むなよ…)」

この後数分、なるべく小声で、部屋の中に聞こえないように注意しながら祐と共にこの状況をどうにかするための相談をした。が、結論は出なかった。この間にも、部屋から声が聞こえている。一体、どうすればいいのだろうか…。

「(…よし、じゃあ二人一気に襦を開けよう)」

「(そうだな、それが手っ取り早い)」

結局、二人で襦を開けることにした。だったら最初から…と思っただが、最早、そんなことも言ってられなかった。

「お前らぁ！女同士でもしていいことと悪いことがあるだろがぁぁ！」

バーン！という効果音がお似合いな感じになった。いや、実際襦

がバーンってなったし。

しかし、そこに広がっていた光景は……。

「ま、ご主人様。<sup>マスター</sup>何を叫んでいるんですか……？」

「そうですね、潤さん。他のお客様に迷惑ですよ」

あ、あれ？

見れば、葉がうつ伏せで寝ていてその背中に千冬が手を置いてい  
るという状況。何が起こっているのか把握するまでに数秒の時間が必  
要だった。

「な、なな……何をしてんだ……？」

分かり切ってることだけど、一応聞いておくことにする。

「何って……マッサージですよ。エンジェルライフにいたときは良く  
やってあげてたんですよ」

千冬は笑顔で言った。

「あ、ああ。マッサージ……。そうか、マッサージか」

俺は脱力して、その場に座り込んだ。……千冬はマッサージが得意  
なのだろうか。そのことを祐は知っているのだろうか、と聞いてみ  
ようと思った。が、聞く必要もなかった。笑いを堪えるのに必死そ  
うな祐がそこにいた。

「お、お前え……」

「いや、すまん。あまりにお前が慌てたんで面白くてね……ブハッ！」  
我慢できずに吹きやがった。うるさい。汚い。唾を飛ばすな。

「はあ……無駄に疲れた」

「じゃあ、潤さんもマッサージしてあげましょうか？」

「え、いや……いいです……」

そうですね、と残念そうに、だけど、どこか面白がっているよう  
な顔だった。もしや、この人……おれが何を想像していたか知ってる  
のか……？ いや、そんなことがあるわけない。

「そうだ、露天風呂入りに行くか。（ここ、混浴だから！）」

「……おう、そうだな」

混浴か……。いや、何も期待してないから。期待する気も失せてる

から。

## 天使とハプニング

露天風呂…寒い…。いやー寒い。なんだこりゃ。風呂の温かみを感じられないぜ。横にいる祐を見ると、息が出来る限界ぎりぎりまで体を沈めて暖をとっている。

「にしても、女子組は遅いな」

「ぶくぶくぶくぶく」

「日本語喋れや」

「いや、すまん。今のは屁だ」

「汚い。近寄るな。離れろ」

冗談だよ！と言ってから、祐も疑問符を頭の上に浮かべる。

「確かに遅いな。またマッサージでもしてんじゃねえか？」

なんでだよ…。風呂入りに来てまでマッサージやってもらうとか

…。いや、叶ならあり得るか？

「ごめんなさい、遅くなりました」

「あー…」「おー…」

最初に現れたのは千冬だった。服の中に隠した意外なボンキュッボンが姿を現した、と言うべきか。そのスタイルはモデル並のものだった。

「どうしたの？叶、早くしなよ」

「で、でもお…」

どうやら叶はまだ更衣室にいるらしい。千冬が無理矢理腕を引っ張って連れて来ようとしている。

「叶ちゃん、どうしたんだ？」

「俺に聞くなよ。…貧乳を気にしてんじゃねえか？なんてっ たって小学生並…。あー、えつとお…」

ゴゴゴゴゴゴゴゴという感じの黒いオーラを後ろに感じるぜい…。

「ご主人様？私、小学生よりは胸、ありますよ？」

なんか笑ってる！怖い！その笑顔は怖いよ叶！

「す、すまん！ただの妄言だ！俺の妄想の中だと、お前の胸はまな板…グボア！」

痛い…。なにも頭殴らなくてもいいじゃん…。

「ご主人様なんてそのまま舌嚙んで死んじゃえбайいですよ」

「お前…それがご主人様ってヤツに言うセリフか…？」

本当に舌を嚙みそうになった。冗談じゃなく、本気と書いてマジで。

「はあ…………俺、先に出る。熱くてのぼせそう、だあ！」

「にやい！？」

いつてえ…、なんだ？石鹸…？誰だよ、こんなところに置いたの…。

「あ、あの…ご主人様…？」

「ああん？」

「どいてくれると、嬉しいのですが……………ていうかどいてください！」

…あー、これが嬉し恥ずかしハプニングってヤツでしょうか。叶の上に俺が覆い被さる形ですっ転んでしまった。

ていうか…あれ？気付いちちゃったけど、コイツ…バスタオルが…。

「……………」

「す、すまん…」

なんとか叶の方を見ないように退いた。俺のバスタオルは外れなかったご様子。なによりだ。

「潤…お前も、やっぱり男だったんだな」

「最高に死にたい気分です、隊長」

「何を言ってるんだ！お前は十分に頑張った。死ぬ必要は無いんだぞ…！」

「ですが、隊長っ！俺は、なんて罪深いことを…！」

「もう何も考えるな！お前は頑張った！それでいいじゃないか…」  
なんてバカなやり取りだろう。

「…とりあえず、俺はもう出る。余計に熱くなった…」  
多分、かなり赤くなってるだろう顔を隠すように俯きながらさっさと出ることにした。

## 俺と天使と時々祐

「千冬ー、ドライヤーどこだー？」

「…祐さん、さっき自分で持ってたじゃないですか」

「あれ？そうだったっけ」

「それに、さっき自然乾燥すればいいやって言っただけですよ？」

「あれー？そうだったっけか？覚えてねーや」

「……………」

「……………」

祐と千冬の声だけが残響として残るなかなか広い和室の一角。俺と叶は変な空気になっていた！

まあ、それもそうだろう。あんなことが起こってしまったって、普通に過ぐすという方が難しいというもの。一体、どうすればいいというのだろうか。

「…はあ………… お前等、いい加減にしとけよ？せっかくの旅行なんだからよー」

「……………」

「……………」

無言。

なんにしろ、俺には叶と話をする勇気がないことは確かだ。

少し長くなってしまった前髪を指先で弄りながら叶のことをずっと考えていたことに気付いて、ちよつと恥ずかしくなる。その一方で何故、こんな奴の為に俺がここまで悩まなくちゃいけないんだよ、という心もあることにちよつと不快になる。

なんて、自己解析している俺は、意外と心に余裕があるのではないだろうか。

否。

そんな訳がない。叶のバスタオルの下まで見てしまった俺に、心の余裕などあるわけがない。自己解析は、ただの暇つぶしだ。元か

ら自己解析が趣味という変な男なのだ、俺は。

「おい、潤。ちょっと来い」

「……………おう」

「お前さあ、なんで叶ちゃんと話さないんだ？」

今日で三度目になる中庭。先程と変わらない闇はやはり肌に刃物を突きたてられているような感覚に陥る程の寒さだった。

「なんでつて言われても……」

あんなことがあれば当たり前だろう！とは威張れないよなあ。

「とりあえず、話はしとけよ？これは、俺と叶ちゃんの仲、お前と千冬の仲。それから、俺と千冬、お前と叶ちゃんの仲を深める旅行なんだからな」

「そんなの初耳だよ」

いや、聞いたといえば聞いたか？ダメだ、記憶していない。

「途中までは話した筈だ」

あ、やっぱり初耳ではないのか。

「……はあああ。俺、どうすればいいんだああ」

頭を抱えて中庭の小石を見る。小石は、何も語らない。語らないモノは嫌いじゃない。……いや、なんの話だ。

「それは、自分で考える。……まあ、宿題出しといてやる。お前は叶ちゃんと、どんな仲になりたいんだ？」

俺の横に座っていた祐は急に立上り、俺を見下ろして言った。

自分で考える。俺が一番嫌いな言葉だ。初号機パイロットさんに助言してた人もなんか言ってたっけなあ。自分で考え自分で行動し  
る的な感じで。

「ちゃんと考えておけよ。答えは明日聞いてやる」

そう言っつて、祐は部屋とは真逆の方に歩きだした。トイレにでも

行くのだろうか。

「…何が、宿題だよ。…俺が嫌いな物第一位じゃねえか」  
呟いて、部屋に戻ることにした。

部屋に戻ると、叶の小さな背中が目に映った。何故か体育座をしている。千冬はどうしたのだろうか、と思ったがなんとなく分かった気がした。

「…なあ、叶」

話をしてみようと思った。あいつらがくれたチャンスだと思った。だから無駄にはしていない。

「……………」

やはり反応は無いか…。そう判断して明日のことで話をしようとした。独り言みたいになってしまっただろうか。と思っている間に、叶が口を開いた。

「ご主人様。ご主人様は…やはり胸が大きい人の方が好きなんでしょうか」

…！？

何の話だ…。

だが、そんなこと分かり切ってるだろうに…。

「何を今更」

むしろ巨乳好きです。

「むう……………」

変なりアクションされた。なんだ「むう」って。いじけてんのか？

「まあ、別にいいんじゃないの？まずお前、体格が小学生染みてるし」

「……………実際、小学生だって言ったらどうします？」

「……………どうもしねえ」

「そうですか……………」

ダメだ……！変な空気は変な空気のまま、変わることはできないと  
いうのか！？

その変な空気を外に逃がそうと、窓を開けた。瞬間、冷たい風が  
入ってきた。分かり切っていたことだが、ちよつと驚いてしまう。

「寒いです、ご主人様」

「……すまん」

すぐに窓を閉める。

「……俺、お前のご主人様失格だな。あれだけのことで、お前と話を  
する勇気も無くなっちゃった。もうご主人様って呼ばなくていいぞ。  
それこそ、スカポントンでもいい」

「……スカポントンさん」

「……実際に言われるとムカつくなあ……」

ていうか「ん」が多いんだよ。スカポントンさんって、言い辛く  
ないのかよ。

「なあ、叶。お前さ……」

あれ……。何を言おうとしたんだっけ……。……ああ、そうだ。

「この前も聞いたけど、なんか欲しいもんとかあるか？明日、町に  
行くとか言ってたし、なんか買ってたよ」

ド忘れしたせいで妙な間が空いてしまった。が、幸い、叶はそん  
なことも気にせずに答えた。

「私を物で釣ろうとしてもダメですから。猫じゃないんですよ？」

「……猫じゃないの？」

「猫じゃありません……」

心外、といった様な声で叶は言った。

「……じゃあさ、者ならどうだ？」

「え？」

叶は驚いていた。それもそうだろうなあ、と思った。

## 天使の機嫌

変な夢を見た気がした。

実際どんな夢を見たかは覚えてない。だけど、嫌な夢だった気がする。寝汗びっしょりだし。

部屋を見渡すと、まだ皆寝ているようだ。祐に限っては、千冬の腹の上で寝ている。

「腹枕……………」

千冬は苦しそうに唸っているが、なんとなく面白いので放っておいた。

…さて、問題は叶なのだが……………。

なんで俺の布団に入ってきてるのか、疑問を投じたい。無理矢理起こしてやろうと思ったけど、幸せそうな叶の寝顔を見ると、無理矢理起こすのも気が引けた。

起こさないように、物音立てず布団から脱出。そしてそのまま朝の新鮮な空気でも吸ってこようと、部屋を後にした。

部屋を後にした俺は、旅館の外にいた。

しかし、冬の朝の空気は冷たすぎた。このままお前は凍結されてマグロと一緒に運ばれるのだと言われたら、俺は信じてしまっただろう。怖い怖い。

昨日の夜だが、叶に背中から抱きついてみた。勿論、あの「じゃあ者ならどうだ」発言のときである。そしたら、「あなたじゃ私を釣ることなんて一生粘っても無理です」と叶に一刀両断されてしまった。まさか、「無理だと思います」じゃなくて「無理です」と断言されるとは思ってもいなかっただけに、ショックは相当なものだ

った。まあ、その時の叶の耳は赤くなっていたので、羞恥心はあったのだろうと思う。恥をかかせてやった、という達成感の様なものがあつたのは内緒だ。

昨日の苦い記憶を噛みしめ、今日の予定を思い出す。

祐曰く、今日は町に行くそうだ。そこで色々買い物をしようとのことだった。どうせ、アイツのことだ。買いたい物全て、誰かに奢ってもらおうという考えだろう。図々しいにも程があるというものだ。

…今日は、なんとか叶に機嫌を良くしてもらおう。今持っている金、全てを叶の為に使っても良いと思った。

叶は、やはり起きても機嫌は良くならず、俺のことを避けている様だった。俺が寝てる布団に勝手に入ってきておいて、これは無いか？と言おうと思ったが、余計に機嫌を悪くしそうだったから止めた。

機嫌は悪くても俺の横にいてくれるのは、一応主従関係の様なものになっているからだろうか。

町は、それなりに綺麗なモノだった。町と言っても、昔の町。ん？意味が分からない？

えつとだな…まあ、江戸時代の様な建築物が多く建て並んでいるのだ。店員も着物を着ていて、タイムスリップしてしまった様な感覚に陥ってしまう。土産物売ってる店はかなり多く、食べ物もおいしそうな匂いと共にかかなりの数がありそう。見て見ると、観光客の所々に武士の様な服装をした人も見える。江戸村…みたいだと思つた。

その町をちょっと歩いてから、祐は立ち止った。

「よし、じゃあこっからは自由行動だ。皆適当に廻ってくれ」

そう言つと、祐と千冬は当たり前のかの様にさつさと二人でどこかに行つてしまった。

「…じゃ、俺達も適当に見て回るか」

「……………」

無言で頷く叶。目線はずっと足元を見て、そこから動くことはなさそうだ。

小さなため息を残し、俺は叶の手を握つてさつさと歩きだした。

叶の暴走。

俺は買つてやるから、適当に選んでこいよと促した。叶は、大量のお菓子を持つてきて「ん！」と俺の目の前に差し出してきた。どうやら、「これ欲しい」と言つてる様だ。先程、朝飯を食べたはずなのに…叶の体のどこにこの量の菓子達は収まるのだろう。

その後は、お菓子を食べたいと言つた叶のためにベンチの様な座れる場所を探してやつた。

まだ午前の十時にもなっていないのに、とても疲れた。

ベンチに座つた叶はドンドンお菓子を腹に詰め込んでいく。コイツの胃は四次元に繋がっているのだろう、というくだらない予想をして、俺は時間を潰していた。

…叶を見ると、その完璧さに遂見惚れてしまふ時がある。と、言つても、大人の魅力と言う訳ではない。あくまで少女として、完璧と言うことだ。しかし、まつ毛長いな。

「…？どうかしましたか、スカポントンさん」

「……それ、まだ続いてたんだな」

「冗談です」

ニヤついてやがる…。こいつ、絶対面白がつてやがるな…。

…これだけ見ると既に機嫌は直つていると考えていいのだろうか。「おお！こりゃまた美少女さんネ！どう？ちよっとお着替えしない

？」

なんかテンション高いニューハーフが来た。そしてそのまま叶が連れていかれ「ゑ？」。

「……………まあ、不良に連れていかれた訳じゃないし着替えが終わったら戻ってくるだろう」

叶に買ってやった菓子を食って待つことにした。

「お、お待たせしました…」

「……………おう」

食いかけたクッキーを落とした。

驚いた。あまりに綺麗すぎたから。

髪型をツインテールからロングにして、桜の花が散っているピンクの温かいイメージの着物があまりにも似合いすぎたから、驚いた。

「キミ、この子の彼氏？どう？あなたもお着替えしない？」

そう言われたと思った次の瞬間には、俺は店の中にいた。

「とてもお似合いですよ、ご主人様<sup>マスター</sup>」

笑顔が眩しい。

「…お前こそな」

その笑顔に対し、俺はなんだ。テンションが上がらない…。

叶の綺麗な着物に対し、俺は新撰組と書かれた着物を着ていた。

あのニューハーフ曰く「あなた。絶対これ似合うわよん」このことだった。

「おうおうおう、お二人さん。仲睦まじい感じですねあ」

声のした後ろを見ると……………えつとお…誰？

「ちょ…！なんだよ、お前等をここに連れてきてやったのは俺だぞ

「!?」

「…え?じゃあ、おまえ…」

「勿論。鹿山祐とは俺のことだぜ!」

後で髪を束ねている所為か、全く気付かなかった。祐もあのニューハーフに目を付けられたのだろっ、新撰組の服を着ている。横に並ぶ千冬は、白と水色で彩られた雪の結晶の模様。叶とは対照的な冷たい感じの着物だ。だが、千冬が着ることで冷たさが少なくなっている。

「お前らこそ、楽しんでる様だな」

「おう!千冬はここに来るの初めてだしな。いろいろ楽しませてやらないと!」

うーん、テンション高くて鬱陶しいな。

「…ニューハーフって怖いよな」

「…そうか。じゃあ叶ちゃんとお前も無理矢理か…」

祐のテンションを下げることに成功。それでも、コイツの扱い方は心得ているつもりだ。

ここからは、結局四人固まって行動した。叶は食べ物以外に興味は無い様で、お土産には目もくれない。そんな様子を、俺達は苦笑いして見ていた。

途中、赤いリボンがあった。叶の機嫌を悪くした時にでもプレゼントするか、と思ったので買っておいた。

そうこうしてる内に昼になり、定食屋で江戸時代の武将達が食べていたとされるメニューがあったので、皆で食べることになった。叶ただ一人だけが、大盛りを頼んでいた。だというのに、叶の腹が膨らむことはなかった…。

## 旅行三日目の朝 天使達の悪戯

三日目の朝。今日が終われば、明日は自分の家へと帰ることとなる。嬉しい様な寂しい様な、そんな修学旅行最終日の様な気持ち。どうも、昨日歩きすぎたせいだか眠い。枕の傍にある時計を見ると、まだ六時にもなっていないかった。もうひと眠りするか。そう思い、布団を掛け直す。

「……」  
「なんかが聞こえた。」

良く聞くと、クスクスと笑っているようだ。

「……」  
頭を覚醒しようと急ぐが思考回路が未だ覚醒の兆しを見せない。というか、まだまだ眠いと言わんばかりに覚醒を阻止してくる。あれから、どれくらい時間が経ったのだろうか……。

「せーの……」  
三人揃った声が聞こえた。俺は思いもしなかった。これが俺の最後になるだなんて……。

「ギギギギッギイギギギギギギギ」

「ぐわああああああ……!!!!」

嫌な音がした。黒板に爪を立てて引つ掻いた時の様な嫌な音。てか、鼓膜！鼓膜が死ぬ！

「そりゃああ！」

掛け声とともに変な浮遊感。

「や」

大抵の想像は出来た。

「め」

だけど、想像できたところでもう遅かった。嫌な遠心力が体を揺さぶる。

「ろおおおおおおおお！」

言った時には遅かった。既に布団ごと俺は投げ飛ばされ嫌なスロ―モーションが流れる。

そしてそのまま、「ドカンッ！」と音を立てて壁に激突した。

「いってえゝなゝゝ俺を殺す気か!？」

「あっはっは。お前が起きないからだぞ？顔に落書きしても起きないなんて、どんだけだよ」

!?

顔に落書きい…?

急いで鏡を探すが、見つからない。

「はい、潤さん」

千冬から手鏡を貸してもらう。

そこには綺麗な伯爵の顔が映った。

「…うわああああ！祐、テメー！」

尚も祐「あっはっは」と陽気に笑っていやがる。

とりあえず、顔を洗おう。…油性だったらどうしよう。

そんなこんなで騒がしく、お客さんに迷惑が掛かってそんな朝は終わった。

## 雪の予兆

朝の飯は自由な時間に自由な量だけ食べていいと言われている。

その朝飯を食べに行こうと木の匂いが少々キツイ廊下を歩いて食堂に向かっている訳なのだが……。

朝はホントに酷い目にあつた……。祐と千冬、そしてまさか葉がグルになって俺を貶めるとは思わなかった。葉の場合、一昨日の仕返しと言わんばかりの笑顔だったしな。

「いつまで落ち込んでんだよ。朝のちよつとした寝起きドツキリじやねえかよお」

「落ち込んでるわけじゃねえよ！」

「はは、じゃあしょぼくれるなよ」

「意味変わってねえよ……」

実際、言葉の詳しい意味など良く知らないのだが。いつも通りの祐との話に俺は脱力してしまった。

俺達の前を歩いている千冬と葉は楽しそうに談笑している。どうせ、朝の俺の顔がどうだったとかそういうことを話しているのだろう。

「なあ、昨日聞き忘れたけどさ……お前って結局、叶ちゃんとどんな関係になりたいんだ？」

「ん？そうだな……俺は叶と——」

食堂の中は、人が少なかった。ここは老人が多いから、朝の散歩にでも行っているのだろうか。食堂は、所謂、バイキング。和風な旅館に合わない洋風な作りになっており、妙な違和感がある。

今日連れていきたい場所ってのはどこなんだ、と祐に聞いたところ、

「ひ・み・ちゅ」「うるせえ、失せろ」

真面目に吐きそうになったのは何年ぶりのことだろう…。現に、目の前の飯を前にして食欲が失せてしまった。

そんなやり取りをした朝食の後は自由行動だった。だが午後の三時までには、旅館の入り口付近に集合してほしいとのことだった。

「あの人は私達をどこに連れていく気なんでしょうね、ご主人様」

「……いい加減、名前で呼んでやれよ……。朝は仲良く俺を投げ飛ばしてくれたんだからよ」

「あう…すみません。あまりにも面白そうだったので、遂…」

叶はどうやら機嫌は完全に良くなった様で、ここに来る前と同じように接してくれるようになった。いやー、良かった。ここに来て機嫌が悪かったら、俺にはもう手の付けようがないからな。

「祐がどこに連れて行くかなんか俺にも分からねえよ。祐と違って俺はこの常連じゃないからな」

叶は「ですよ」と言ってから「旅館の常連って、どれだけ旅好きなんですか。あの人は」と微笑を浮かべていた。だから名前で呼べやっちゅーに。……やっちゅーに娘さんは某小説にお帰りください。

俺と叶は、とりあえずで自分達の部屋へ向かっていた。町へ行っても、どうせまたお菓子を食らいつくすだけだろうから部屋で大人しくしていた方が良さだろうと思ったのだ。

部屋に入ると、窓を開けっ放しにしていたからだろうか、冷たい風が入ってきた。窓を閉める際、なんとなく空を見上げた。

「……雪が降りそうだな」

小さく呟いてから窓を閉めた。

叶が、露天風呂に言ってから三十分以上が経った。部屋にいるだけでは暇だから、と言って露天風呂に行っているのである。確かに、暇であることには同意をした。故に俺は今寝ているのだ。どうせ三時まで、まだまだ時間があるのだからいいじゃないか。

昨日と今日の朝の疲れの所為か、早めに意識が飛んで行った。

## 暇つぶし

長い夢を見た。内容はやはり覚えてない。でも、なんだか恐ろしい夢だった気がする。叶が来てからというものの寝汗が酷い寝起きが酷く多い。

目を覚ましたのは午後二時のことだった。部屋にこもってから、随分な時間が経ったものだ。部屋は何も変わらず、ただ畳の独特の臭いが部屋を支配していた。視界の端に何か黒いモノが翻った気がした。

叶だ。

俺に背中を見せて、なにやら作業をしている模様。……その小さな背中を見ていると、ちょっと悪戯したくなってくる。

叶に気付かれないように、物音をたてないように近づく。畳を踏んだ瞬間「ミシッ」と音がしたが、どうやら叶は気付いていない様子だ。かなり集中しているのだろう。

そして、叶の右後方にしゃがみ……耳に息を吹きかける。  
「うぎゃあ!？」

その声のでかさにこちらがビビってしまった。

「な、なな何をするんですかマスター!」

「いや、ごめん。なんかあまりにも集中している様だったから遂…  
…」

誤魔化すこと無くありのままを話す。

「で、なにやってんの?」

叶の背後にある何かを見ようとする叶が邪魔する。

……………? 何故だ。

「マスターにはまだ早いです」「エロ本でも見てんのか」「違います！」

即答されてしまった。どうやらホントに違うようだ。まあ、分かり切ってることではあるのだけど。

「まあ、別にいいけど……さ」

然程、興味があるというわけでもない。

しかし、三時にまではもうちょっと時間があるが……そこら辺で寝転がっておとなしく待つか。

……

……

……

……

……

……

……このままだと暇すぎて発狂しそうだ。

「なあ、叶え」

「なんですかあ？」

先程の作業を再開したらしい叶が、俺の顔も見ずに言う。見ていると、何かを探しているようだ。

「なんか暇つぶしとかできるものないか？」「私は暇じゃないので、マスターはお外へ出かけてきなさい」

お前は俺の母親か。

俺は叶が言った通り外に出ようかと思ったが、外は寒いだろう。

なんせ今は太陽が出てない。だから小説を持って中庭に行くことにした。

「そんなところで暇つぶしですか、潤さん？」

声のした方を見ると、まあ予想した通り千冬が立っていた。

「まあ、そんなところだな。……そういえば、千冬なら知ってるんじゃないのか？ 祐が俺達をどこに連れていこうとしてるのか」

「いえ、私もここに来るのは初めてですし、祐さんは私にも教えてくれませんでした」

意外だった。祐なら千冬にくらい言うと思っていたのだが……。

まあ、千冬が妙にニヤニヤしているので祐に口止めされてるという可能性も否めないが。

しかし、二人きりになるのはこれが初めてか？ ここへ来る途中、電車やバスの中で二人で話したが、二人きりというわけでは無かったからな。

こう見ていると、千冬もかなりの美人だと思う。銀に近い白の髪は雪を思い立たせる、だけど、決して冷たそうという訳でもない。それは千冬の見せる笑顔のおかげだろう。まつ毛は叶と同じくらい長く、胸も……まあそれなりにある。スタイルがかなり良いようで……。

ジロジロ見ていると、千冬は何を思ったか俺の横に座った。中庭に足を投げ出して。

「……潤さんは叶と、どんな関係になれたら良いと思います？」

遂最近、祐にも聞かれた気がする。その時、俺はなんて答えたんだっけ……？ ああ、そうだ。

「俺は、叶と……所謂、友達以上って関係になりたいって思ってる」  
千冬は、分かってましたと言わんばかりの笑顔で俺を見ながら言った。

「叶も喜ぶと思います」

言うのと千冬は立上り、「また後ほど」と言っでどこかへ行ってしまった。

今更だが、既に友達以上の関係ではあるのだろうか……。まあ、

とりあえず、最近分かったことは、俺がロリコンだということだな。

## ホワイトクリスマス

三時になって旅館の入り口に集まった俺たちに祐はタオルを渡してきた。

「どういうことだ？タオルなんか渡して……」

「まあまあ、ついてくれば分かるって」

いつもの軽い口調で言った祐は、一体なにを企んでいるのか……俺には分からなかった。

暑い……冬だというのに、服は汗でびしょびしょになっていた。

祐についていくと、俺達の目の前に広がったのは森だった。冬なのに枯れずに緑色の葉を茂らせている。

祐は、はぐれない様に気をつけるよと言ってさっさと森の中に行ってしまった、俺達三人は急いで祐の背中を追った。

そして、その森の中は異様に暑かった。タオルを渡してきた理由はきつとこれだろう。

歩き始めて一時間くらい経っただろうか……というところで、祐が足を止めた。

「こっから先は、これまでよりも緩い斜面になってるから楽に行けるはずだ。その前に腹ごしらえと行こうぜ」

そう言いながら、祐はリュックの中からシートと弁当を取り出し慣れた仕草で地面に敷いた。

「おい、祐。お前は一体どこに行こうとしてるんだ？」

「俺は子供の頃から愛と正義の味方ってのに憧れててな」

妙に話がかみ合わなかった。祐はちょっと恥ずかしそうに話した。「正義の味方ってのは、誰かのために何かをやるってことだろう？

なら、手始めにお前らに協力してやろうと思つてさ」

きつとコイツは、俺と叶の仲のことを言っているのだろ。あの時の「叶とどういう関係になりたいか」という質問は、この為か…。

千冬と叶は、明るく談笑している。それが、明るすぎて、どこかに消えてしまいそうな光を連想させた。叶はさっきから色々な表情になっている。笑顔になって顔を赤くして頬を膨らませて、また、笑顔になる。それがあまりにもおもしろくて、ちよつと笑つてしまった。

そして、祐の顔を見て、話の続きをした。

「で、お前は自分の憧れのために友人を利用した、と言う訳か」

「利用じゃないさ……。お前らの仲つて、なんか見てて歯痒いんだよ。たぶん、千冬も同じこと考えてる。だから、一気にお前らをくつつけさせてしまおうという訳さ」

歯痒い……。とはどういうことだろう。まだ恋人とかいう関係にもなっていないのに。

「まだその関係になつてないこと自体が、歯痒いんだよ」

俺の心を見抜いたように、祐は言った。

ほれ、と祐は俺に箸を渡してきた。俺の前に置かれた弁当は豚力ツ弁当だった。さすが、俺の一番の友人である。俺の好みを心得ている。

祐の顔にグッジョブサインを送ると、笑顔で答えてくれた。

「よし！ そろそろ行くか」

全員が弁当を食い終わつたのを見計らつて祐がシートを片付け始めた。

そのまま、また小一時間歩いた。祐の言つとおり、斜面は緩やかになつていて、最初よりは楽に行けた。

そして……。

「すっげー……」

「……………綺麗……………ですね」

「ええ、とても」

三人一様に同じ顔をしていたことだろう。なんせ、今の季節が冬だということを忘れてしまう程の大自然が目の前に広がったのだから。

斜面だったのが急に平面になったと思ったら、そこには正に色々な花が咲き乱れていた。

赤く、青く、白く、黄色く、花が爆ぜていた。そして、その花達の中心に大きなクリスマスツリーがあった。木に飾りをする必要はない。周りの花達が十二分にその役割を果たしてくれている。

空は既に暗くなっていた。雲で星は見えないが、きっと、今も変わらず光り続けているだろう。たとえ、既にその光がなくなっていたとしても、光がなくなった事実が地球に届くのは何年も、何十年も、何百年も先になるのだ。その光が全て見えなくなるまで、俺は空を眺めていたいと思う。

なんだが、最終回に相応しい様なセリフを並べてしまった。まあ、閑話休題だ。

今とても重要なことは、俺と叶の仲なのだろう。友人が用意してくれた大事な舞台<sup>ステージ</sup>だ。無駄にする訳にはいかない。……………祐に舞台を用意してもらったのは、二回目か……………。

俺と叶は、いつの間にか大きなツリーの前に立っていた。空気を読んだのか、千冬と祐の姿は見当たらない。きっと、これから起こることを笑いながら見ているのだろう。

「なあ、叶。俺さ、ご主人様失格だな」

前に一度、言ったことがあるセリフを吐いた。それを聞いて叶は焦ったように言った。

「そ、そんなことないです！ 私こそ、従者失格です……………」

予想していたセリフとちょっと違ったが、問題ない……………はずだ。

「じゃあさ、一度仕切り直ししないか？」

「え？」

「だからさあ。主従関係とかじゃなくて……その………だな」

ダメだ、言おうとするとなかなか言えない……。きっと顔は既に火に炙られた様に赤くなっているだろう。

「……俺の……俺の、彼女とか……に……その………なってみる気とか……ないのか？」

裏返りそうな声を抑えて、静かに告げた。なんとカッコわるい告白だろう。涙が出そうだ。

「……………」

叶は顔を俯かせてしまって、表情を見せてくれない。

途端に、逃げ出したくなってしまう。ここに来るまでに、何度かイメージしていたが、こんなに恐怖を感じるとは思わなかった。逃げ出しそうな足を必死に抑えて、叶のリアクションを待つ。

「……………はい」

驚いた、というのが素直な感想だ。

「はい！」

叶は顔をあげて、もう一度、強く確かに……僅かに赤く染まった頬を緩ませた笑顔で頷いてくれた。

「ほ、本当にいいのか？ 俺なんかで？」

遂、確認を取ってしまうほどに、困惑していた。

叶は、目に涙を浮かばせていた。俺の錯覚かもしれないが。

「私は、ご主人様だから頷いたんです。私は、ご主人様のことが――

――

「大好きです」

少しの間をおいてからのそのセリフは、強烈な破壊力を持っていたという……。

「俺も叶のこと……が――あれ？」

いつの間にか、頬に熱い雫が滴り落ちていた。目に涙を浮かばせていたのは、俺の方だった……。

「ご、ご主人様？ どうされたのですか……？」

叶が、あわあわと慌てていた。俺は、大丈夫だと言って涙を拭いた。

「俺も、お前のことが好きだ」

今度こそ、はつきりと言う。俺は見下ろして叶は見上げる。その身長差はどこか心地良いモノだった。

叶は、俺に体重を預けてきた。その体重は恐ろしいほどに軽く、例えるなら、お湯が大量に入っていると思つてやかんを持ってみたら空っぽで力が有り余ってしまうという感覚だ。

そういえば、と俺はポケットの中から町で買ったリボン……という髪を縛る赤い紐を取り出す。

「……？ なんですか、それ」

「いや、ちよつとね」

そう言いながら、叶の髪をツインテールの形で縛っている黒いゴムを外した。綺麗な黒髪はサラサラと夜風に靡いた。

「マ、マスター？」

そして、俺が持つてる赤い紐を叶の髪を束ねてツインテールになるように縛った。前から縛るといふのは、少々無理があつたような気もするが……それでも何とか縛つて、叶の脳天に手をポンと置く。「一応、プレゼント的なものだ。できれば大事にしておいてほしい」今の俺は、笑顔になれているのだろうかと心配だった。さっきみたいに、涙が出てきたら嫌だな……。

叶は、ちよつと肩を竦めてから、目を瞑つて顔を俺の方に向けた。

……。

「え、えと……叶さん？」

「……もう、マスター？ 空気を読んでください……私だつて……その、恥ずかしいんですから」

ああ悪い、と言いながらも俺は固まっていた。だって、その体勢は……。

もう一度、叶は瞼を閉じて――。

俺の唇と叶の唇が――。

その数秒は、一年間と同じくらい……否、もっと長く感じた。  
雪が降った。ホワイトクリスマスだ。雪が降っても尚、寒さを知  
らぬ花達は咲き乱れ、俺と叶を包んで歓迎してくれていた様な気が  
した。

## エピローグ

旅館から駅に行くためのバスの中は、なかなか快適だった。来る時は鬱陶しく思えた、バスの揺れは心地良い眠気を誘ってくれた。

あの後——告白した後——、祐と千冬は俺達がキスをしてから数分後経ってから、周りの森から現れた。さすがに不謹慎か、と声とかが聞こえないようになり遠くに行っていたらしい。キスを見られていなかったという事実を聞かされた時、かなり安心したのは言うまでもない。

恋愛小説だとかは、こういう区切りのいい時で終わってしまうのだろう。だが、人生は終わらない。何も変わらない。ただ、俺達の生き様を観客のいない舞台<sup>ステージ</sup>で演じなければいけないのだ。

人生とは、運命<sup>ルット</sup>だけでできているのか。それとも偶然でできているのか。

運命<sup>ルット</sup>は全て決まっていって、俺達はただ、その運命<sup>ルット</sup>の上を走り続けなくてはいけないのだろうか。

それとも、運命<sup>ルット</sup>は決まっていなくて、全ての人間の選択で世界の運命<sup>ルット</sup>を決める事ができるのだろうか。

決めているのは、運命自身なのか、人間なのか。或いは人間以外の動物なのか。

きつと、世界は偶然でできているのだろう。偶然宇宙が生まれて、偶然生物が生まれて、偶然、俺という一生物が生まれた。そして、偶然で叶も生まれた。祐も偶然で、千冬も偶然なのだろう。なら、その偶然に感謝すべきだ。運命として決まっていた、なんてあり得ない。だって運命を決められるのはきつと神だけだから。そして、この世で神は存在を確認されていない。確認もできていない存在は存在していることにならないのだから。

全ては、人間の心の拠り所だったのだ。神を生みだして、神に縋って、神に感謝する。そして、神を恨むのだろう。存在していない

存在に対して恨むも崇めるも絶るも感謝するも、勝手だ。だが、  
全ては、知能を持った生物が征する。知能を持ったのが、人間で  
なく、犬であれば犬がこの世を征することになるのだ。

努々、忘れてはいけない。全ては、偶然の産物なのだと。人間だ  
から高度な知能を持ったのではないのだと。高度な知能なんて、ど  
の動物が持つていても当たり前なのだから。

さて、なんだか小難しい話になってしまった。まあ、時にはこん  
な終わり方もいいだろう。……否、始まり方だろうか。いやいや、  
始まりでも終わりでもない。なら、これは、きつと続きなのだろう。  
長い人生のたった一欠けらの記憶。数年すれば忘れてしまうくだら  
ない話なのだ。

しかし、数年たつても、俺が叶に告白したことは忘れないだろう。  
それほど、大事なことなのだ。

さあ、続きを見よう。

まだまだ、見たい物は多かれ少なかれあるのだから。

……でも、その前にちょっと一休みしよう。この旅行はちょっと  
疲れた。叶の機嫌や仲の展開が激しすぎた……。

そう考えながら俺は、お世辞でも座り心地が良いとはいえないバ  
スの座席で深い眠りについた。

## 戻った日常

あの旅行から既に五日という時が経った。

旅行最終日、俺と叶の関係はちよつと……というか、かなり変わった。キスをしてしまう程の仲になった……はずだった。

「ご主人様、寒くて凍え死にそうです」

「俺のが寒いよ！ さつさとベッドから出る！」

エアコンを付けて暖房は効いてる筈なのにどこか肌寒い冬の正午。俺と叶は前までと全然変わらない会話をしていた。恋人同士がするような会話を一切していない。

旅行から帰ってきてからたった一日だけ、会話もできない程に緊張してしまっただが、それ以後は変わらぬ関係で日々を過ごしていた。結局こんなものか、と思った。付き合うだか何だか言っても、元より俺の家で過ごしていたのだ。何かが変わる、なんてことはきつとこれから先もないのだろう。

「……ご主人様、寒いんでしたら……入ります？」

言って、叶はベッドにペースを空けた。

「……………」

変わったこと、一つだけあった。ここ最近、叶が妙に積極的に俺の近くにしようとする。飯を食べるときも、前まで母親の隣で食べていた叶だったが、最近じゃ俺の隣で食べるようになった。夜はベッドの中にいるのは俺一人なのに、朝起きると俺の隣に一人増えているのだ。なんか怖い。

ただ、本当に怖いのだ。ここまで近づかれると、離れてしまったとき俺の心はどれだけの深い傷が残るのか……。叶の年齢だって分からないし。設定では十六歳となっているが、もっと若いと思う。だって身長が身長だし。

「なんか今、不愉快なことを言われた気がします」

「俺は何も言っていないのにネ。不思議だね」

俺は溜め息をつきながら冬休みの課題を見た。授業を祐と一緒にサボったりしたせいか、教師に目をつけられ、俺と祐だけかなりの量の課題を押し付けられた。

「これ、終わるかなー」

課題の用紙の束をヒラヒラさせながらぼやく俺を見て、叶が呆れたように言った。

「自業自得ですよ。……なんなら教えてあげましょうか？」

「どうせなら全部お前がやってくれ」

「ダメです。それじゃあご主人様のためになりません」

「いやいや、俺が楽できるっていう利点があるじゃないか」

「私が得することが何一つないんですけど……」

後ろのベットのの中からジト目で見られるような視線を感じるが、まあ、気にしないでおう。

「はあ、仕方ないですね。じゃあ、ちょっとだけですよそれに教えるだけです」

うーん……まあ教えてくれるだけでもいいか。

ベットから蛇の脱皮の様に抜けだしてきた叶の服装は、高校から寒さ対策として強制的に買わされたセーターだった。親が、強制的とかあり得ないわ……と、何かに絶望していた。

しかし、問題は下だ……。

「なんでミニスカートなのお！？」

「え？ 特に理由なんてありませんけど」

「あ、あつそ……」

これは……誘っているのか！？ 最早そうとしか思えない！ 黒いニーソの間から見える太ももとか……ビバ絶対領域！ 俺、こんなで集中できるのか……？

「はい、じゃあ私が教えられるのはここまでです」

「あじゅじゅしたー（ありがとうございましたー）」

まったく集中できなかった……。頭からはプシュと、暑くなりすぎた体から蒸気が抜けていく音が聞こえる。

しかも、叶はそんな俺を見て何故か機嫌が良いようで……。こいつ、狙ってやってるのか？

その時、急に俺の部屋のドアが開いた。

「潤、叶ちゃん。そろそろご飯に……。どうしたの、潤？」

「何も聞かないでくれ……。お願いだから……。」

## 日常2（前書き）

随分と更新していなかったな。  
読んでもそんなでもないと思うし、  
いいか。とか思ってた俺を  
どうか許して。

## 日常2

昼飯はスパゲティだった。しかもコンビニの。もうちよつと美味しいのを用意してくれよマイマザー。

いや、美味しいよ？

コンビニのスパゲティも好きだよ？

だけどさ、もうちよつとナニか欲しいでしょ？

コンビニに行ったならハンバーグ弁当とかあったでしょ？

なんでスパゲティなのさ。

そんな風に心の中で思いながらスパゲティを食べていると、叶が驚きの行動に出た。

「あゝんしてください」

「何故だホワイ」

幾らなんでも積極的になりすぎだ。

親もいるのに……、

「あらあら、レディーのお誘いを断るの？ それでも紳士なの、潤？」

「俺がいつ紳士になると言ったよ」

親は叶の味方だよ。

まあ、嬉しいんだろうなあ。息子に彼女みたいな女がいるって。

いや、実際彼女になったんだけどさ。

ダメだ。実感が湧かない。

「ほらご主人様！ あゝん！」

遂に叶は強制的に俺の口を開けてようとしてきた。

「いふあい（痛い）……」

「我慢してください」

なぜあゝん、なんて甘いシチュエーションなのに心が痛いのだろ  
う。

ああ、きつと俺の情けなさに俺が泣いてるからだ。  
自然と涙腺が緩みそうになった……。

「ほらご主人様！ あつちのゲームもやりましょうよ！」  
「へいへい」

今、俺と叶はゲーセンにいる。

勉強をしていたのだから午後は遊びに行きましょう、というのは  
叶の案である。

しかし、幾らなんでもこんな騒がしい所に来なくてもいいじゃないか……。

ただでさえ勉強中の叶のいろいろな部分（主にミニスカから見える  
柔らかそうな太ももとか）を眺めて脳がショート寸前なのだ。そ  
んな時にこんな騒がしい所に来たら、ホントに脳が壊れちまいそう  
だ。

それに、叶は良く変な物に絡まれる。

不良とか事故とか不良とか。

理由の大半は不注意とその容姿のせいだろう。

小学生染みた体形のくせに無駄に整っている顔。長いまつ毛。く  
つきりした赤い瞳。サラサラとした黒くて長い髪。

おまけに、服から露になるしなやかな肢体。

肢体だけ見れば、色っぽいとか思えるのだろうけど。

「うゝ、入らない……」

そんな感じで色っぽい云々を考えていたら、またいつもの幼い感  
じの叶がそこに立っていた。

なにをやっているのか、と見てみるとUFOキャッチャーをやっ  
ている御様子。

中には可愛らしい黒ネコと白ネコのぬいぐるみが、これでもかと  
言う程大量に入っている。

それでも取れないのは店員の陰謀か。  
否。

クレーンがぬいぐるみを取っても、運ぶ途中で落ちてしまうのだ。  
理由は簡単。取れた瞬間嬉しそうに騒ぐ叶がいるから。

要するに自業自得。取れては喜び落ちては悲しむ。そんな表情の  
代わり具合が面白くて、遂笑ってしまふ。

「む、なんですか御主人様」

「ほらそこどけ。俺がやってやるよ」

「うゝ……はい」

名残惜しそうに透明な箱の中を見るが、いつまでも取れないでい  
ると、お金がさすがに勿体ない。

実は言つと、そこまで器用な男ではないが俺はこういうゲームは  
得意なのだ。

ああ、勘違いしないでくれ。

得意なだけで、好きな訳じゃないからな。

そんな言い訳めいたことを言ってる間に、黒ネコと白ネコを一匹  
ずつ釣った。

「ほら、取れたぞ」

「おゝゝ……かわいいい！」

白ネコと黒ネコのぬいぐるみを大事そうに両手で抱え、頬を擦り  
付ける。

……お前の方が可愛いよ、とは言えないな。さすがに。

## 日常2（後書き）

更新すつげー遅れました。

一ヶ月以上たつてたんじゃないですかね？

というのもきちんとした理由が一つあります。

ネタが思い付かねえ。

俺自身からの経験の元、ネタを書けばいいんですけど……。

元より出掛ける事も少ない俺。更に女とイチャイチャなんかしたこともない俺です。

なんとか頭を使って今回の様な妄想話を作り上げた訳ですよ。

そんな訳で、これからも更新スピードは一ヶ月に一回とかになるでしょう。

それでもどうか、これからもご愛読して頂けると幸いです。

### 日常3

「はい、ご主人様」

「……………ん？」

叶が白ネコの人形を差し出してきた。

何故だホワイ。

「だってご主人様白のイメージあるし……………」

心を読むな。

まあいいか？

「いいんですか」

「…………小説だからってそういうことするのは、やっぱりダメだろ」

「……………ん？ なに言ってるんでしょう私たち」

「……………ホント、何言ってるんだらうな」

不思議な体験だ…………。

ま、まあいい。

「それで？ 俺が取ってやったのに、白ネコはいらねーってか？」

今の俺は悪戯気味に笑っていることだろう。

「ち、違います！ えと、その…………ほら！ 私たちの絆、みたいな

！」

いや意味分かんねーよ。

ネコが絆ってどうなんだ。

「とりあえず持っててください」

「はいはい、分かりましたよっと」

叶の手にぶら下がる白ネコを取る。

…………どうせなら、どこかに付けたいな。

まあ家に帰ったら付けれる場所を探るか。

「それで？ 他にナニか欲しいのはないのか？」

既にあれから数十分が経過した。

叶はナニかが欲しいと言うわけでもなく、ただ必死になって太鼓の達人をやっていたりする。

「……リズム音痴なのな」

「う、うるさいにゃ！」

「……何今の愛くるしい語尾」

益々猫らしくなってきましたよ？

「し、舌噛んだ……」

ああ、噛んだのか。

口を押さえながら悶える姿は結構可愛かったりした。

「まったく、なにやってんだよ。ほら、口の中見せろ」

「ふあい（はい）……」

あー、と言いながら口を開ける。微笑ましい。

それにしても……妙なエロスを感じますな。

歯は綺麗な真っ白。歯茎も健康そうだ。下は綺麗なピンク。それが少し色っぽさを放っている。

「ど、どうれふか（どうですか）？」

「んー、血は出てるけどすぐ痛いのも収まるだろ。もう閉じていいぞ」

「ん、ありがとうございますゅ」

「……………」

「同じとこ噛んだ！」

バカなのかコイツ。

「まったく、付き合ってられねーぞ。ゲームのスコア、出てるぞ」

「にゃ！？ 忘れてた……」

その表情があまりにも面白かった。

だから、笑ってしまうのも当たり前だった。

「な、なに笑ってるんですか！ ふん！ もういいです。私お手洗い行ってきます」

「おう、いつてこい」

ちよつとからかい過ぎただろうか。

随分と憤慨させてしまったらしい。

しかし疲れた。考えたら、ここに来てずっと立ちっぱなしだ。

近くに休憩用のベンチを見つけ、腰掛けて休むことにした。

「あ、あの……」

騒がしいゲーセンの中。

一つの声が、すぐ近くで聞こえた。

「……なにか用ですか？」

俺に話しかけるのだから、必然的に俺の知り合いだと思った。

だけど俺はこんな人知らない。

肩まで届く黒い髪に、赤い服が良く映える。

顔は、整っている。叶よりも美人かもしれない。

……叶は子供だから比べるものでもないんだ。

「えっと、黒い髪で二つのお下げをしてて背が低い女の子の保護者の方、ですよね？」

「は、はい。そうですけど……」

何故知っているのか、と言えばここにいたからだと言えは終わる。だがそれをわざわざ確認する理由が見つからない。

訝しげに、女性の顔を見た。

「えっと、なんかゴツイ男の人に追われてここから出ていってしまったけれど……」

「は……？」

一瞬、思考が停止した。

これが初めてではない。誰かに絡まれるのは、既に何度か体験した。

だけど、今は逃げた。

しかも、店の外に。

「あの……バカ！」

「あ、あの。警察に」

「いえ大丈夫です。教えていくれてありがとうございました」

早口で言い終えて、すぐの店の外に出る。

本当は、なんで助けなかった、と言いたかった。見ていて尚何故放っておいた、と。

だが、当たり前だ。

俺だって知らない奴が不良に絡まれても見て見ぬふりをするだろうし。

教えてくれただけでも有り難いものだ。

さて、どこを探せばいい。

裏路地か。

ゲーセンのすぐ隣にある細くて薄暗い道を見るが、いない。

「叶ー！」

名前を呼ぶが、それがどれだけの効力を持つかわからない。否。

逆に叶をピンチに追い込む可能性だってある。

なら、静かに探すのが一番だろうか。

まったく、あいつもとことん黒猫だよ……。

### 日常3（後書き）

気付いたら、なんか適当に続きを書いてた自分がいた。  
二重人格なんかな、俺。

余談だけど黒猫って不幸とか不吉とか言うヤツの象徴らしいっすね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5056s/>

---

エンジェルライフ

2011年7月20日03時27分発行